

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 3 年 度

2 0 1 2 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 3 年度

2 0 1 2 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局



写真1 福西 33 号墳（北から・第IV章-8）



写真2 福西 33 号墳出土遺物（第IV章-8）

ご あ い さ つ

京都市は、平安京建都以来、我が国の政治・文化・宗教の中心として様々な歴史が展開され、華麗かつ繊細な文化が重層的に今に伝わる、世界でも稀有な歴史文化都市であります。

市内には、全国の国宝の19%、重要文化財の14%をはじめ、数多くの文化財が存在し、埋蔵文化財の包蔵地も広く分布しています。古代から近世まで時代ごとに積み重なった遺跡は、我が国の歴史や文化を正しく理解するうえで、欠かすことのできない大切な国民共有の財産であります。

本市では、先人が残したこうした貴重な埋蔵文化財を適切に後世に伝える責務を果たしつつ、将来にわたって日本文化を国内外に発信していけるよう、埋蔵文化財の保護とその活用に取り組んでおります。

この度、平成23年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成いたしました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに、各調査の実施に当たって、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成24年3月

京都市文化市民局文化芸術担当局長 平 竹 耕 三

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 23 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 23 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文中で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（66～70 頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系 VI による。標高は TP（東京湾平均海面高度）による。
- 5 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 7 遺物整理にあたっては、岩本淳子・岡本沙千代・掛上英明・上茶谷美保・上別府亜紀・小出忠之の協力を得た。
- 8 調査及び本書作成は京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

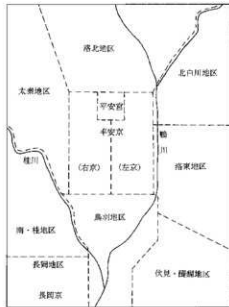


図1 調査地区割図

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
朝堂院跡・聚楽遺跡（上京区千本通丸太町下る主税町 1167）	3
III 平安京右京	9
1 三条二坊二町跡・西大宮大路跡（中京区西ノ京銅駝町 65）	9
2 三条三坊十四町跡・西ノ京遺跡（中京区西ノ京桑原町 3 の一部、西ノ京月輪町 32-1）	13
3 四条二坊三・六町跡、西朝負小路跡、壬生遺跡（中京区壬生淵田町 14, 15）	18
4 六条二坊三町跡・西大宮大路跡（下京区西七条赤社町地内）	23
IV その他市内遺跡	27
1 嵯峨遺跡（右京区嵯峨釈迦堂門前裏柳町 16, 16-1）	27
2 史跡・特別名勝天龍寺庭園，史跡・名勝嵐山（右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 68）	31
3 大徳寺旧境内（北区紫野大徳寺町 49-1 の一部他）	36
4 上京遺跡（上京区上立売町 22-1, 裏風呂町 349-3）	41
5 北白川廃寺（左京区北白川上別当町 6-1, 6-7, 7-4）	48
6 伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）（伏見区桃山町永井久太郎 56）	52
7 伏見城跡・桃陵遺跡（伏見区奉行前町 4-2）	55
8 福西古墳群（西京区大枝東長町 1-206）	58
9 鳥羽離宮跡（伏見区竹田中内畑町 145）	63
V 試掘調査一覧表	66
報告書抄録	71

図 版 目 次

図版 1	平安宮
図版 2	平安京 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
図版 3	〃 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
図版 4	〃 左京 四・五・六条 一・二坊
図版 5	〃 左京 四・五・六条 三・四坊
図版 6	〃 左京 七・八・九条 一・二坊
図版 7	〃 左京 七・八・九条 三・四坊
図版 8	〃 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
図版 9	〃 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
図版 10	〃 右京 四・五・六条 三・四坊
図版 11	〃 右京 四・五・六条 一・二坊
図版 12	〃 右京 七・八・九条 三・四坊
図版 13	〃 右京 七・八・九条 一・二坊
図版 14	太秦馬塚町遺跡・常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内／嵯峨遺跡・史跡名勝嵐山・ 史跡特別名勝天龍寺庭園／梅津坂本町遺跡／大徳寺旧境内
図版 15	寺ノ内旧域・上京遺跡・相国寺旧境内・上御霊遺跡／植物園北遺跡／北白川廃寺・ 池田町古墳群／法興院跡
図版 16	知恩院境内／寺町旧域・御土居跡／六波羅政庁跡・妙法院境内／法性寺跡 ／中臣遺跡
図版 17	伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）／桃陵遺跡・向島城跡／稻荷山古墳群・ 伏見稲荷大社境内／法界寺旧境内／史跡名勝嵐山／勝持寺旧境内
図版 18	福西古墳群／中久世遺跡・大藪遺跡／唐橋遺跡／下三栖城跡／長岡京跡・ 水垂築山城跡
図版 19	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡
図版 20	長岡京跡・鶏冠井遺跡

表 目 次

表 1	溝 5 出土土師器皿観察表	44
表 2	遺物概要表	70

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て792件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事については、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導をおこなっている。その業務は、当初は文化財保護課が、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきたが、平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課保護第二係が埋蔵文化財行政を担当している。

4種の行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査・試掘調査については、そのほとんどを国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による詳細分布調査と発掘調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下、「理文研」という。）へ委託し、その成果は毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成23年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査を取りまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上非常に重要な業務であり、現在4名の技師がこの調査に従事している。

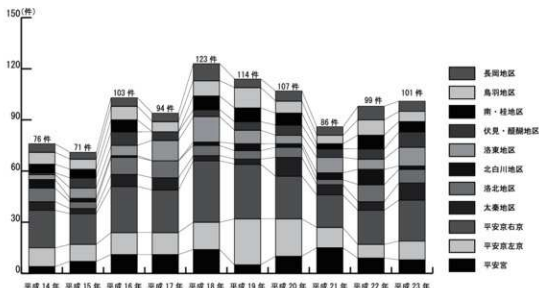


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

平成 23 年 1 月～ 12 月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第 93 条）・通知（同法第 94 条）件数は、総数で 1004 件になる。これは前年比で 102 件増（11.3% 増）と増加している。世界的不況の影響で減少した平成 21 年度以降、2 年連続で増加傾向にある。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査 456 件（前年 453 件，0.6% 増）、試掘調査 101 件（同 92 件，9.8% 増）、発掘調査 7 件（同 19 件，63.2% 減）、慎重工事 443 件（同 338 件，31.1% 増）の指導をおこなった。

こうした指導に基づき、文化財保護課が実施した試掘調査件数は 101 件で、前年の 99 件に比べて増加している。地区別に見れば、平安京右京地区、太秦地区に顕著な増加傾向が認められ、郊外における宅地造成や共同住宅の建設が目立つ。一方、平安京左京地区の中でも、現在都市中心部では依然調査件数は少なく、当エリアでの開発が停滞していることが看取できる。

2 平成 23 年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では、京都市域を 12 のエリアに区分している（図 1）。平成 23 年の試掘調査の地区別件数は、平安宮地区 8 件、平安京左京地区 11 件、平安京右京地区 24 件、太秦地区 10 件、洛北地区 8 件、北白川地区 2 件、洛東地区 11 件、伏見・醍醐地区 9 件、南・柱地区 6 件、鳥羽地区 6 件、長岡京地区 6 件、京北地区 0 件である。このうち 15 件（V 章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、うち埋文研が 5 件（No.7・17・71・88・92）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が 4 件（No.2・3・36・43）、株式会社イビソク（代表 森重幸）が 1 件（No.49）の調査を年内に実施した。

発掘調査に持ち込まれたことで挙げた顕著な成果として、大炊御門大路両側溝と冷泉院築地内溝を検出した平安京左京二条二坊三町（No.36）、平安時代前半の掘立柱建物と小径を検出した平安京右京二条三坊八町跡（No.43）、古墳時代前期の竪穴住居を 5 棟検出した植物園北遺跡（No.71）がある。また、工事の掘削深が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、または設計や工法の変更により当面の保存が図られたため、発掘調査に至らなかった例が 5 件（No.6・22・45・90・96）あり、本書において報告する。

一方、保存措置は講じられなかったものの報告すべき成果のあった試掘調査として、基壇延石抜き取り痕跡を検出した平安宮朝堂院昌福堂跡（No.1）、西大宮大路西側溝を検出した平安京右京五条三坊六町跡（No.8）、邸宅の区画溝を検出した上京遺跡（No.16）、埴輪が出土した伏見城跡・桃山古墳群（No.21）、中世の礎石建物と池を検出した嵯峨遺跡（No.64）、大徳寺の濠を検出した大徳寺旧境内（No.67）、縄文遺物包含層を検出した北白川廃寺（No.72）の各調査が挙げられる。

また、本年度は史跡指定地（京都市指定含む）での現状変更に伴って実施した試掘調査のうち 1 件について、詳細を報告する（No.65）。

（家原 圭太）

II 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡 No. 1



図3 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は千本丸太町交差点の南東、上京区主税町地内における作業所新築に伴う調査で、古墳時代の集落跡である聚楽遺跡と平安宮朝堂院昌福堂跡に該当している。昌福堂は、十二堂ある朝堂の中でも東第一堂にあたり、平安時代の儀式書¹⁾では、太政大臣・左大臣・右大臣の座とされる。平成19年度には、調査地の北東において発掘調査(図3・調査1)がおこなわれ、北縁基壇の延石列を検出している²⁾。調査地は、昌福堂基壇西縁と南縁推定箇所であり、関連する遺構を検出することが期待された。

調査は平成23年1月6・7日に実施、面積は22㎡である。なお、本件については、2月28日に施工時の立会調査を実施し(図4・調査2)、凝灰岩を多量に含む落ち込みを検出したため、あわせて報告する。

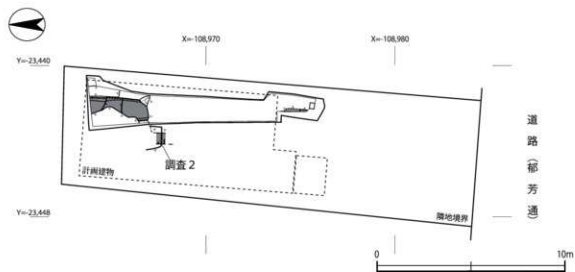


図4 調査区配置図 (1:200)

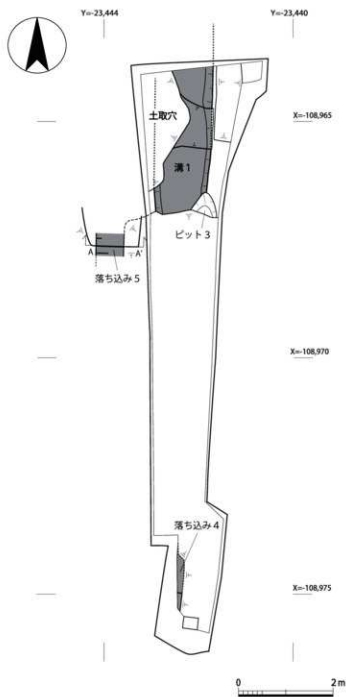


図5 平面図 (1 : 80)

2 層序と遺構

調査は、基壇西縁を探るために敷地北東端から東西方向に掘削を開始し、凝灰岩の破片を含む遺構を検出した。そのため、南側に調査区を広げたところ、遺構は南北方向の溝であることを確認した。溝の埋土は凝灰岩片を多く含み、基壇西縁の可能性が高まったため、さらに調査区を南に広げ南縁の確認をおこなった。

現地形は、北から南に下る緩斜面である。基本層序は表土以下、GL-0.2m で近世整地層、-0.3

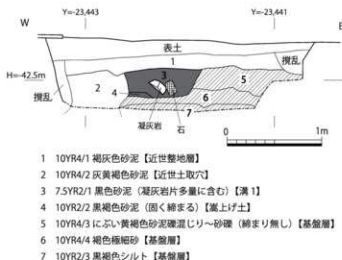


図6 北壁断面図(1:40)

～0.4m でにぶい黄褐色砂礫～砂泥礫混じり層の基盤層で、上面が遺構面である。以下、-0.6m で褐色極細砂層、-0.7m にて黒褐色シルト層と続く(図6・7)。なお、にぶい黄褐色砂礫～砂泥礫混じり層は締まりが無いが、朝堂院北半付近では、平安時代の遺構面が良好に遺存する場合の基盤層として捉えられる。

検出した遺構は、基壇凝灰岩延石抜取溝、江戸時代前期の土取穴・ピット・落ち込みである(図5)。

溝1(写真1・2) 南北方向の溝で、幅1.1m、深さ0.3m、長さ3.1m以上となり、

さらに北へ続く。埋土は黒色砂泥で凝灰岩片を多く含む。凝灰岩には面が残る破片があることや、調査1で検出した北縁基壇延石のレベル高を勘案して、基壇延石の抜取溝であると判断した。

落ち込み4 調査区南端で確認した落ち込みである。西側と南側は調査区外に広がり、それ以外は攪乱による削平をうける。残存する規模は南北1.4m、東西0.2m、深さ0.3mである。埋土が溝1と類似すること、凝灰岩片を含むこと、溝1の延長線上に位置することから、基壇凝灰岩の抜取溝の可能性が高い。

土取穴 調査区北西隅で確認した土取穴である。埋土からは平安時代の土師器・瓦(緑釉瓦を含む)・凝灰岩片とともに、江戸時代初頭の焙烙鍋が出土した。

ピット3 溝1を切るピットである。径0.5m、深さ0.2mである。埋土から平安時代の瓦片が出土した。

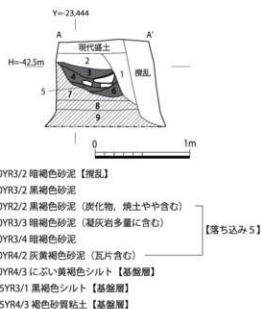


図7 落ち込み5北壁断面図(1:40)



写真1 溝1検出状況(南西から)



写真2 溝1完掘状況(南西から)

落ち込み5 調査2で検出した落ち込みである。断面観察のみであるが、幅0.6m以上、深さ0.4mで、東と南側は攪乱による削平をうける。埋土は4層に分かれ、最下層に瓦片、中層に被熱痕のある凝灰岩片、最上層には炭化物・焼土を含む。

3 遺物

土取穴から江戸時代前期の土師器皿・焙烙・平安時代の平瓦・緑釉瓦が出土した。溝1から凝灰岩が、落ち込み5から凝灰岩と平瓦が出土しているが、時期を特定できる遺物はみられなかった。写真3は、溝1から出土した凝灰岩である。3面が残り、厚さは9.5cmである。



写真3 溝1出土凝灰岩

4 まとめ

今回の調査では、昌福堂基壇延石の抜取溝を検出したが、残された課題も多い。ここでは、溝1、落ち込み4・5の関係と今後の課題を述べてまとめたい。

南北棟である昌福堂には、東西両面に3箇所の階段の存在が知られている³⁾。昌福堂の建物規模は明らかではないが、陽明文庫本『宮城図』には、桁行柱間の間数が七間と記されている。七間であれば、階段は中央と南・北の両第二・五柱間に設けていることが一般的である。

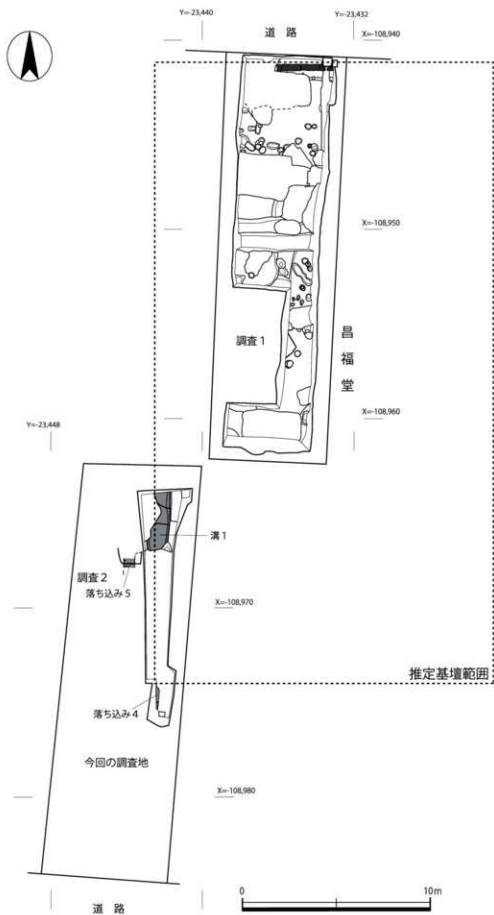


図8 昌福堂遺構配置図(1:200)

切石積の階段については、階段側面耳石の中央線または外側辺を建物の柱の中心線の延長上にあるように据えており⁴⁾、階段の幅は建物柱間一間分であることが多い。建物桁行一間が長岡宮朝堂院と同様に十三尺とするならば⁵⁾、約4mとなる。また、平安宮朝堂院明礼堂では、基壇西縁と西面北階段を検出しており⁶⁾、階段の出は1.1mであることが明らかになっている。

上記をふまえて溝1、落ち込み4・5の関係をみると(図8)⁷⁾、溝1の南延長線上に落ち込み4がある。埋土に凝灰岩片を含むなどの共通点が多いことから、溝1は基壇西縁である可能性が高い。落ち込み5については、溝1を西縁とするなら、階段基底部の痕跡とも考えられるが、平城宮第二次朝堂院の階段の出の様に、ぼらつきが認められることから断定できない。また、埋土に炭化物や焼土を含むこと、出土した凝灰岩に被熱した痕跡が認められることから、火災処理土坑の可能性も否定できない。

以上、検出した遺構の関係を整理したが、調査面積が狭小であったため今後に残された問題点も多い。現在の復元案である一間が十三尺の建物であれば、溝1は南階段の想定場所に位置することとなり、落ち込み4・5との関係にも再考が求められる。落ち込み4は、推定基壇南縁の場所であるが、攪乱による削平を受けるものの、さらに南に広がっていることを確認しており、現在の復元案では取まらないことになる。

朝堂院周辺は、遺構面が非常に浅いうえに近世以降の土取穴の影響も大きく、平安時代の遺構の残存状況は芳しくないため、点と点を繋ぐ調査にならざるを得ない。そのため、今後より一層の詳細な観察と記録が必要となろう。(西森 正見)

註

- 1) 「貞観儀式」巻九 朝堂儀条、「延喜式」巻十八 式部上朝堂座条。
- 2) 西森正見「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年。
- 3) 1)に同じ。
- 4) 宮本長二郎「階段」『日本考古学事典』三省堂、2002年。
- 5) 寺升 初代「平安宮の復元」『平安京提要』角川書店、1994年。
- 6) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安宮Ⅰ」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊、1995年。
- 7) 図8については、前掲註6)で提示された復元案に従い、前掲註2)の調査で確認した北縁基壇を当てはめて図示したものである。

III - 1 平安京右京三条二坊二町跡・西大宮大路跡



図9 調査位置図(1:5,000)



写真4 調査区全景(西から)



写真5 西大宮大路路面(西から)

1 はじめに

本件は、中央区西ノ京銅駝町地内における、貸店舗建設に伴う調査である。調査地は、平安京右京三条二坊二町の北東隅と西大宮大路に該当している。二町内の調査では、平安時代前期の泉を伴う建物跡¹⁾や平安時代中期の建物跡3棟、井戸1基のほか、区画溝や柵列が確認²⁾でき、二町東半の宅地利用状況の一端が明らかになっている。今回の調査では、西大宮大路の確認と、二町北東隅の土地利用状況を確認することを目的とした。

調査は、平成22年12月14日に実施した(京都市内遺跡試掘調査報告平成22年度No.43)。本来なら前年度の試掘調査報告書で報告すべきだが、設計変更の協議が2011年まで及んだため、今年度報告する。調査面積は18㎡である。

2 層序と遺構

調査は、南半部が既存建物の解体中であったため、北半のみに限定せざるを得なかった。調査区は、条坊遺構の確認のため、東西方向に設定した。基本層序は現代盛土以下、中世(室町)～現代までの耕作土で、GL-1.0mにて灰白色シルト(東半は灰色極細砂層)の基盤層で、上面が遺構面である。調査の結果、室町時代の耕作溝3条・区画溝1条・平安時代の西大宮大路西側溝、及び路面を検出した。

溝1(図11・写真4) 南北方向の溝で、西大宮大路西側溝に該当する。幅約1.5m以上、深さ0.4mで、東肩は溝2により削平される。断面観察から、造り替えがあったことが読み取れる。

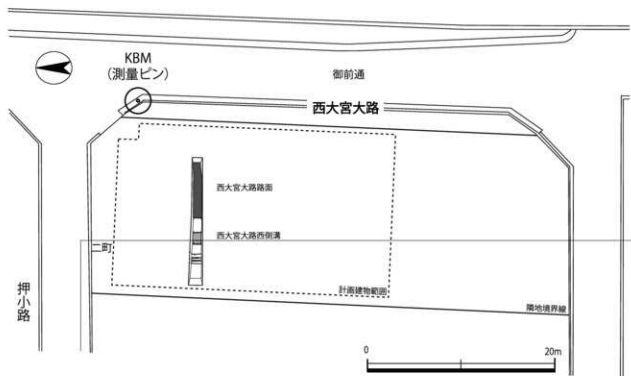


図10 調査区配置図 (1:400)

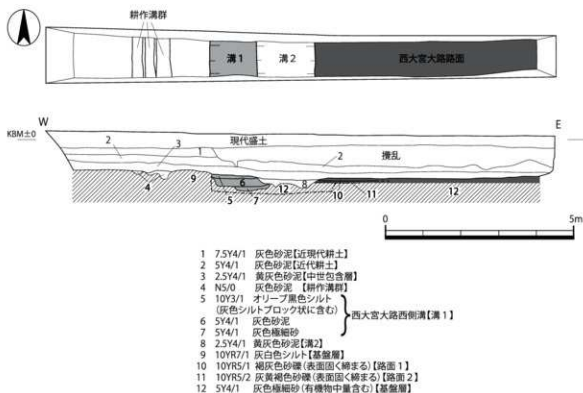


図11 調査区平・断面図 (1:100)

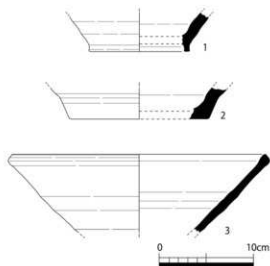


図12 遺物実測図(1:4)

遺物実測図(1:4)は、遺物の断面図を示している。1は須恵器壺の底部である。2は焼締陶器の壺又は甕の底部である。3は東播系の須恵器鉢である。

3 遺物(図12)

遺物は、土師器杯、皿、甕、須恵器甕、鉢、緑軸陶器碗、輸入陶磁器、瓦等が出土しているが、図示できるものは少ない。1は須恵器壺の底部である。体部外面にケズリを施す。底径10.5cmで溝2から出土した。2は焼締陶器の壺又は甕の底部である。摩耗が進み調整は不明。底径14.4cmで包含層から出土した。3は東播系の須恵器鉢である。口径24.7cmで西大宮大路路面土層から出土した。

4 まとめ

今回の調査では、平安時代の西大宮大路西側溝と路面を検出した。『延喜式』では西大宮大路は、路面幅96尺、側溝4尺、犬行5尺、築地基底幅6尺とされる。検出した遺構を当てはめると、溝1は東端を削平されるが、現存幅は約1.5m(5尺)である。犬行・築地の明確な痕跡は認められなかったが、溝1西側の地山の高まりは、あるいは犬行と築地の基底部の可能性も考えられよう。また、西大宮大路西側溝の位置をほぼ踏襲する溝2の存在は、室町時代に至っても土地境として認識されていたことを示している。

平安京右京三条二坊二町では、2件の発掘調査を実施しており、四行八門制に区画された宅地割が復元されるとともに、泉の存在から、湧水を利用した園池が広がっていたと考えられている。今回の調査では、宅地内の土地利用状況は明らかにできなかったが、調査区東半での基盤層である細砂層は、付近に自然流路が存在することを示唆しており、豊富な湧水が得られたことは十分

埋土は3層に分かれ、最下層には砂が堆積し、水流があったことがわかる。最上層には、基盤層に由来するシルトがブロック状に含まれており、人為的に埋め戻されている。遺物は、土師器杯・須恵器甕・黒色土器碗・緑軸陶器・越州青磁の碗・瓦類などが出土した。

路面(図11・写真5) 礫敷きを施した西大宮大路路面である。礫敷きは厚さ5cmで2面確認できた。幅は6m以上で、さらに東側に広がっている。路面整地層からは、須恵器壺・甕・緑軸陶器碗・東播系須恵器鉢・平瓦片などが出土した。

溝2 南北方向の溝で、幅1.5m、深さ0.2mである。遺物は、縄文土器の細片のほか、土

Ⅲ 平安京右京

予測出来る。調査区が所在する右京三条二坊域は、京内でも特に園池が集中する場所であることが、過去の調査実績から判明しており、それを裏付けるものといえる。

なお、確認した遺構は、計画建物の設計変更がおこなわれたため、保護層を設けたうえで地中保存されている。

(西森 正晃)

註

- 1) 近藤知子「平安京右京三条二坊二町跡」『京都市内発掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局、2004年。
- 2) 平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1982年。

III - 2 平安京右京三条三坊十四町跡・西ノ京遺跡 No. 6

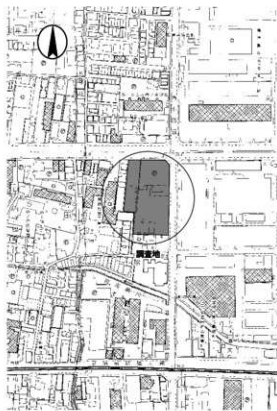


図13 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は、中京区西ノ京桑原町地内におけるスーパーマーケット新築工事に伴う試掘調査である。調査地は、弥生時代から古墳時代にかけての散布地である西ノ京遺跡と平安京右京三条三坊十四町跡に該当している。『拾芥抄』『西京図』では、12世紀前半に、十五・十六町と合わせて六条修理太夫藤原顕季（1055～1123）の所領と記されている。

周辺の調査では、十四町北西部において試掘調査がおこなわれており、室町時代以降の遺物包含層や、平安時代の基盤層を確認している¹⁾。なお、既往の調査成果から²⁾、恵止利小路（現西小路通）を境にして平安時代の遺構面に1m前後の高低差があり、恵止利小路西側に位置する当該地においては、遺構面が地表面から浅い場所に遺存していることが想定された。

調査は遺構の地中保存が前提のため、遺構面のレベルを探ることを目的としたが、場所の制約や計画変更に伴い、3回に分けて実施することとなった。調査は平成22年2月5日、6月21日、平成23年1月5日に行い、調査区は7箇所で面積の合計は192㎡である。

2 層序と遺構

現況は、北から南に下る緩斜面となっており、基盤層も同様の傾きを持つ。基本層序は、全調査区においてほぼ共通しており、現代盛土、近現代耕作土と続き、GL-0.9～1.2mが基盤層で、上面が遺構面となる。基盤層については、北側では、淡黄色シルトや明黄褐色シルト～シルト礫混じりであるが、南側（1・4Tr.）では、明黄褐色シルトの上層に黒褐色シルト層（黒ボク土）が堆積する（図15）。

遺構は、1Tr.で土坑・ピット、2Tr.でピット・溝、3Tr.で南北溝、4Tr.で柱六列・溝、5Tr.で柱六列・ピット群・溝、6Tr.で土坑・溝・ピット・土取穴、7Tr.で土坑などを検出した。総じて、シルト層が露出している場所は土取穴が存在し、礫層、黒ボク土が露出している場所では遺構面が良好に遺存している（図15）。

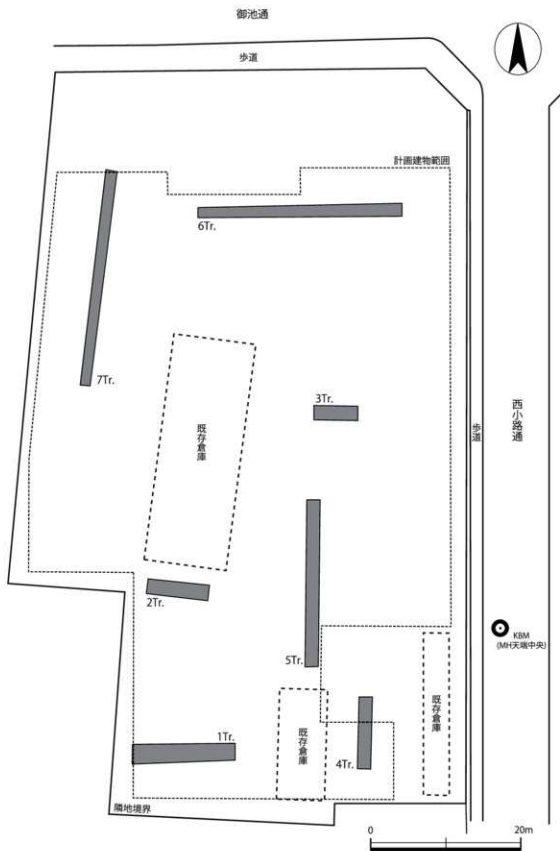


图 14 調査区配置图 (1 : 500)

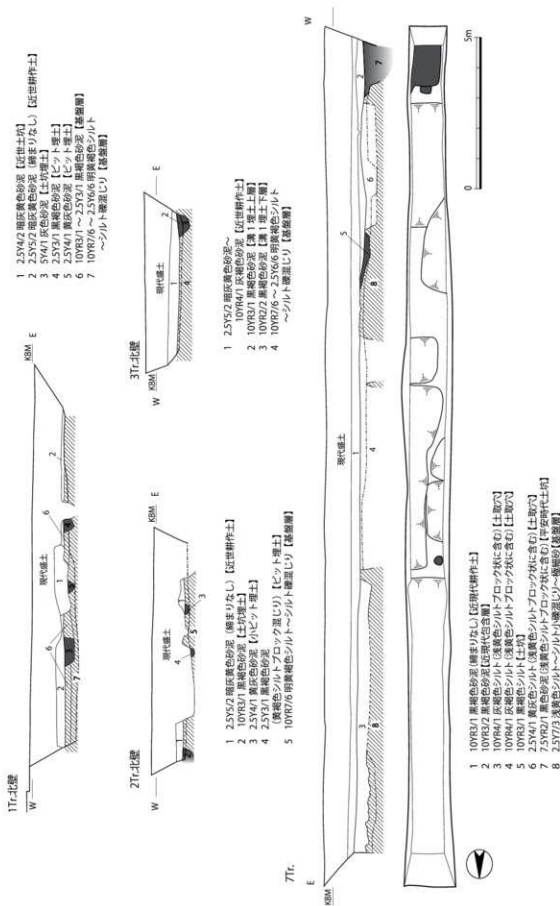


図15 1・2・3Tr.断面図, 7Tr.平・断面図(1:125)

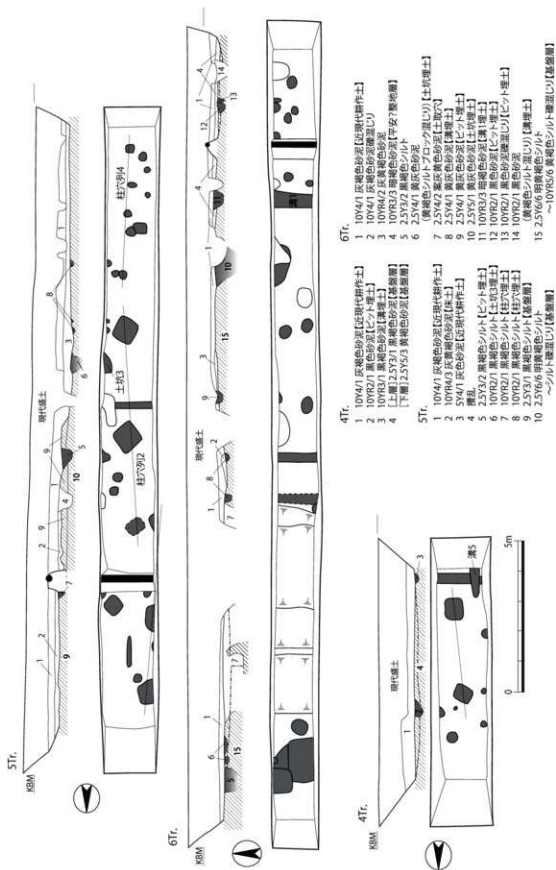


図 16 4 ~ 6Tr. 平面図 (1 : 125)



写真6 5Tr.柱穴列2(南東から)

溝1 6Tr.東半で確認した南北溝である。幅0.75m、深さ0.3～0.4mを測る。3Tr.東端で確認した南北溝に繋がると考えられ、長さは28.5m以上である。埋土は黒褐色砂泥で、平安時代の土師器・須恵器が出土した。区画溝の可能性が高い。

柱穴列2 5Tr.中央で確認した南北方向の柱穴列である。各柱穴は、1辺0.7～0.8mの隅丸方形で、柱間は南が3.45m、北が3.0mを測る。

柱穴列4 5Tr.南半で確認した南北方向の柱穴列である。各柱穴は、1辺0.3mの不整円形や隅丸方形で、柱間は2.1mを測る。



図17 遺物実測図(1:4)

3 遺物(図17)

出土した遺物は、平安時代前期から中期にかけての土師器皿・杯・須恵器杯蓋・緑釉陶器などであるが少量である。1は5Tr.土坑3から出土した土師器杯である。内面をナデ、

外面をヘラケズリを施す。口径12.4cm、器高2.8cmで京都1期新に属する³⁾。2は4Tr.溝5から出土した須恵器蓋である。内外面ともに回転ナデ、口径13.6cm。

4 まとめ

今回の調査では、平安時代前期の遺構が良好に遺存していることが明らかとなった。地中保存が前提の調査のため、遺構の掘削は起こっていないが、僅かな出土遺物からは周辺の調査同様、10世紀中頃には生活の痕跡はほとんど認められず、荒地化、又は耕作地へと変貌したと想定できよう。(西森 正晃)

註

- 1) 平尾 政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1990年。
- 2) 1)に同じ。
- 3) 小森 俊寛・上村 憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

III - 3 平安京右京四条二坊三・六町跡、 西鞠負小路跡、壬生遺跡 No.45

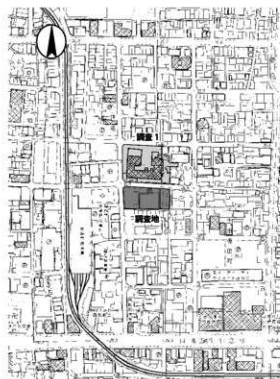


図18 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は、中京区壬生淵田町地内における、スーパーマーケット建設に伴う調査である。調査地は、平安京跡と壬生遺跡に該当している。平安京の条坊では、右京四条二坊三・六町の一部と西鞠負小路にあたり、『拾芥抄』西京図では、三町に小泉厨町とあるが、六町についての記載はない。

周辺の調査では、調査地北隣で発掘調査を実施しており(図18・調査1)、平安時代前期～中期の西鞠負小路に伴う両側溝・柵列・路面、複数の建物跡・柵列・井戸・土坑・溝跡が確認されている¹⁾。西鞠負小路の側溝には新旧が認められ、10世紀中頃までに埋没するもの、室町時代には再び路面として利用されている。建

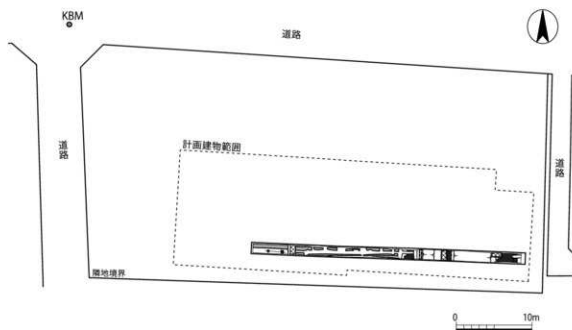


図19 調査区配置図 (1:500)

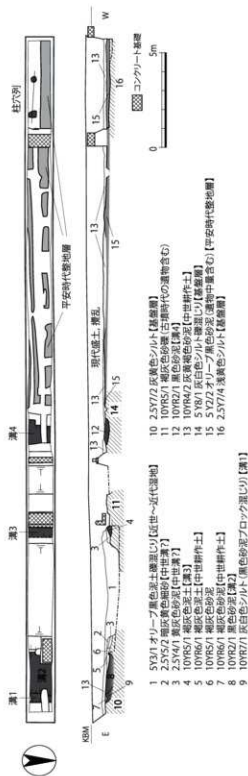


図20 調査区平面図・断面図(1:200)



写真7 西鞠負小路東側溝(北西より)

物群は方位が異なる2群が存在し、建物配置から、四分の一町以上を占めるものと想定されている。

上記の調査成果から、平安時代前期から中期にかけての活発な土地利用状況が明らかとなっていることから、今回の調査では、六町内での遺構の広がり、西鞠負小路の利用状況を明らかにすることを目的とした。

調査は平成23年7月13日に実施、面積は54㎡である。

2 層序と遺構

調査区は、西鞠負小路を跨いで東西方向に設定した。

基本層序は、GL-0.6～0.9mまで盛土、中世～近世耕作土層となり、-0.7m～1.2mで灰黄色～浅黄色シルト、又は褐色細砂の基盤層となり、上面が遺構面である。基盤層は西に向かって下がっており、西半には、基盤層直上にオリーブ黒色砂泥の平安時代包含層が堆積している。また、中央付近で確認した平安時代以降の遺構面となる砂礫層には、古墳時代の摩耗した遺物が含まれることから、流路跡と考えられる。

遺構は、西鞠負小路両側溝・平安時代前期の柱穴群・中期～後期包含層・中世耕作溝群

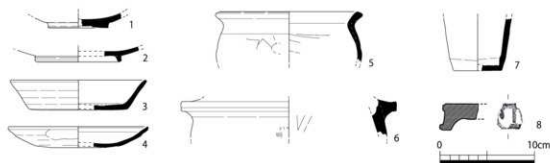


図21 遺物実測図1(1:4)

が確認できたが、小路の路面部分は、近世以降の落ち込みにより削平を受け、残存していない(図20)。

溝1 東端で検出した南北溝で、西鞠負小路東側溝(旧)にあたる。幅0.5m以上で、西肩は溝2に切られる。埋土は黒色砂泥であるが、基盤層由来のシルトがブロック状に混じることから、人為的に埋め戻されたとみられる。

溝2(写真7) 溝1を切って成立する南北溝である。西鞠負小路東側溝(新)にあたる。幅2.0m、深さ0.3m以上で、埋土は黒色砂泥である。9世紀前半～10世紀中頃の遺物が少量出土している。

溝3 中央で検出した南北溝であるが、沼状遺構の重機掘削で誤って掘削してしまい、断面観察に留まった。幅0.6m以上で、西端は攪乱により削平される。深さ0.3mを測り、埋土は褐色灰土である。西鞠負小路西側溝にあたるものと思われる。

溝4 南北溝である。幅1.3m以上、深さ0.3mで、埋土は黒色砂泥である。西鞠負小路内溝の位置にあたるが、北側の調査では、柵列は認められるものの内溝を検出していない。9世紀前半～10世紀中頃の遺物が出土している。

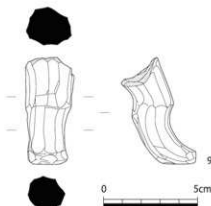


図22 遺物実測図2(1:2)

3 遺物(図21)

遺物は、主に中世耕作土層・溝2・溝4から出土しているが、細片が多く図示できるものは少ない。溝2からは、土師器皿・甕・黒色土器A類杯・須恵器甕などが出土しており、9世紀後半に属するものが大半である。溝4からは、土師器杯A・碗A・高杯・甕・須恵器甕・灰釉陶器などが出土しており、9世紀中頃から後半に属するものが多い。

1は緑釉陶器皿である。蛇の目高台で、底径は6.2cm。2は灰釉陶器皿である。底径は8.5cm。3は須恵器杯Aである。底径10.2cm、口径14.4cm、高さ3.2cm。4は土師器皿Aで、口径14.6cm。5は土師器甕である。6は土師器羽釜である。7は須恵器壺Gで、底径5.0cm。8は半折り曲げ技法の剣頭文軒平瓦である。9は土師器盤の獣脚と思われる。面取りは非常に丁寧である。1・6・8・9は遺構検出中に、2～4・7は溝4・5は溝2から出土した。

四条坊門小路

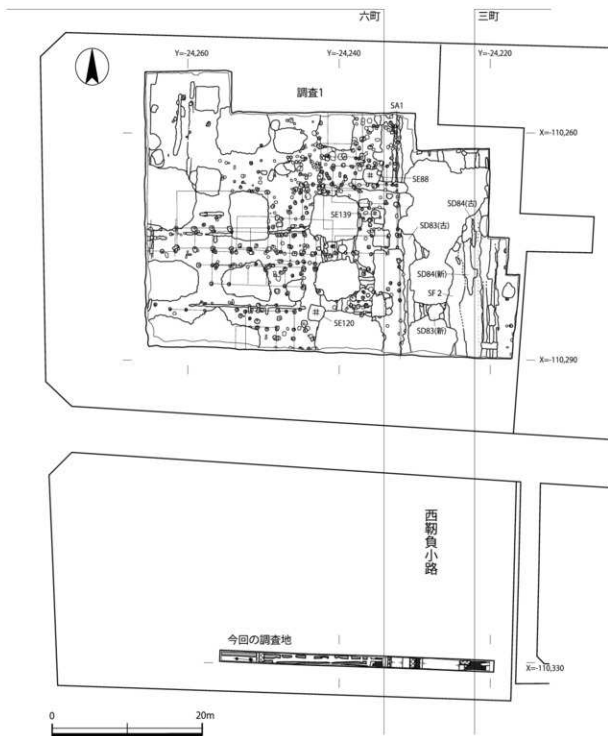


図 23 右京四条二坊遺構配置図 (1:500)

4 まとめ

今回の調査では、平安時代の西鞠負小路両側溝と、六町内の内溝・柱穴列を確認した。六町内の土地利用については、平安時代後期の包含層を残したまま調査を実施したため、柱穴列を一部で確認したのみであるが、包含層からも一定量の遺物が出土することから、調査1と同様に活発な土地利用がおこなわれていたことが窺える。また、西鞠負小路の利用状況としては、側溝の埋土には、9世紀の遺物は認められるものの、10世紀の遺物は極めて少ない。したがって、10世紀中頃には廃絶したとする調査1の成果を改めて裏付けることになったといえよう。

なお、これらの遺構については協議の上、基礎構造の設計を変更し、地中保存が図られている。

(西森 正晃)

註

- 1) 平方幸雄・高橋 潔「平安京右京四条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1991年。

III - 4 平安京右京六条二坊三町跡・西大宮大路跡 No. 8

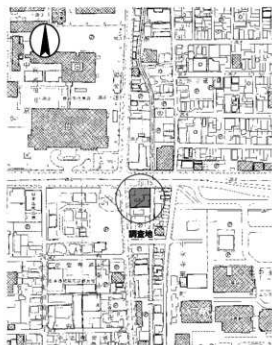


図24 調査位置図 (1 : 5,000)

1 はじめに

調査地は五条通と御前通の交差点の南東に位置するガソリンスタンド跡地で、平安京右京六条二坊三町及び西大宮大路にあたる。周辺ではリサーチパークならびに五条通拡幅工事に伴う一連の発掘調査が実施され¹⁾、遺構の展開状況が広範囲にわたって明らかになっており、特段の攪乱がない限り、平安時代前期を中心とする遺構が良好な状態で確認されている。

今回、道路拡幅予定地内で埋蔵文化財の取り扱いが未定となっていた調査地において、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施した。調査は平成23年3月14日に実施し、調査面積は35㎡である。

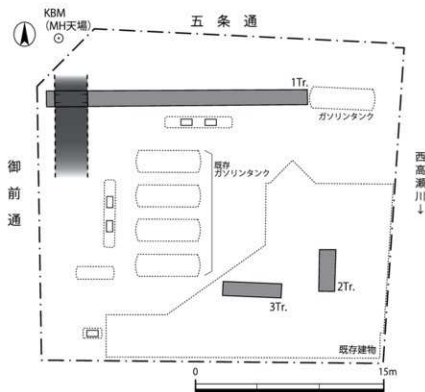


図25 調査区配置図 (1 : 300)

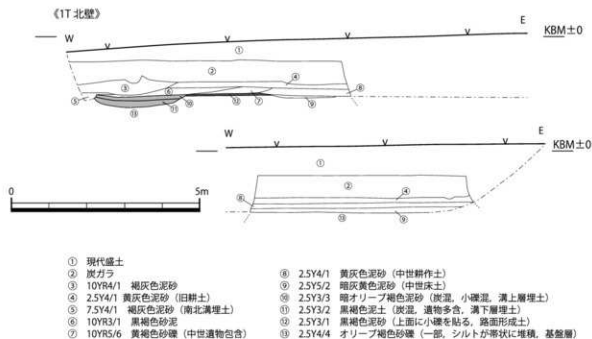


図 26 1Tr.断面図 (1:100)

2 層序と遺構

既存施設の図面をもとに、調査区は既存ガソリタンクと可能な限り重ならない範囲に3箇所を設定した(1~3Tr.)。

掘削をおこなった結果、ガソリタンクや事務所等の既存施設による擾乱が広範囲に及んでいることが明らかになり、旧来の土層堆積が良好に残存している範囲は、1Tr.西端及び東端、3Tr.の一部に限られた。

基本層序は、現代盛土(下半は石炭ガラ)、中世から現代までの複数時期にわたる耕作土層、基盤層であり、基盤層はオリーブ褐色砂礫(⑬層)でおおむねGL-1.1~1.7mで検出される(図26)。

1Tr.西半は西大宮大路西築地心の推定位置に相当し、1Tr.西端より3~5mの範囲における基盤層上面には、径1~3cm程度の小礫層が薄く堆積し、表面は固く締まっていた(⑩層)。この遺構は検出位置より西大宮大路の路面と推定される。ただし、1Tr.東半や3Tr.では基盤層の直上に小礫層は確認されず、中世耕作土が堆積している。レベルから判断して、耕作による削平を受けたものと考えられる。

また、路面遺構のすぐ西で西大宮大路西側溝に推定される南北溝を検出した。溝は幅約2.6m、深さは検出面から0.3mを測る。埋土は上下2層に分けられ(⑩・⑪層)、上層から平安中期、下層からは前期の遺物が多数出土した。

なお、断面図によれば、西側溝の上層部分に限って中世耕作土層まで層位が乱れている。これは少なくとも耕作地となっていた中世の段階まで、西側溝が土地境界などの区画溝として路鑿され、機能していたことを示している可能性が考えられる。

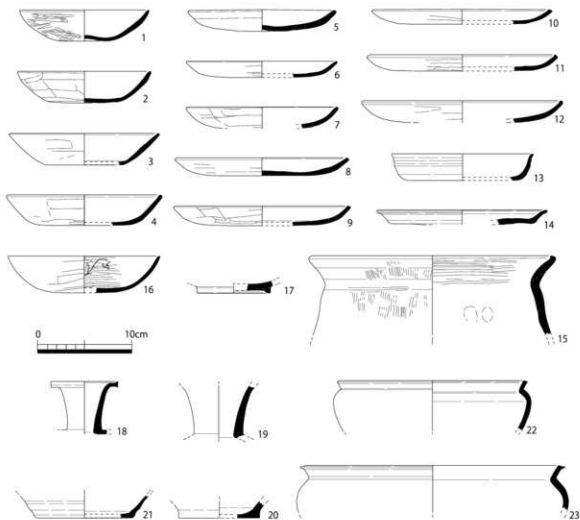


図27 遺物実測図(1:4)

3 遺物(図27)

西大宮大路西側溝に推定される南北溝から、平安時代前期～中期の遺物群が出土した(図27)。出土量はコンテナ1箱程度で、内訳は土師器・黒色土器・緑釉陶器・須恵器・瓦である。

土師器は杯(1～4)、皿(5～14)、甕(15)が出土。杯はいずれも外面にケズリあるいはミガキを施す。13は黒褐色の胎土で、直立気味の口縁部をもつ。14は胎土が粗く、橙色を呈す。13、14とも在地産と思われる。

黒色土器はA類の杯で、外面ケズリ、内面ミガキを施す(16)。内面にはミガキと同じ工具によって花文が施される。緑釉陶器は軟質素地の碗あるいは皿(17)。輪高台で、内外面ともに釉がかかる。

須恵器は壺(18～20)、杯A(21)、鉢(22・23)、甕が出土。いずれもロクロ成形による。20の底面には回転糸切り痕が残る。

図示した遺物は、おおむね京都I中～II中期²⁾におさまるが、これ以外にも京都III期の遺物も小片であるが上層埋土より出土しており、西大宮大路西側溝の埋没時期を示している。

4 まとめ

調査地において平安京西大宮大路の路面と西側溝を検出した。遺物の出土状況から、西側溝は平安時代前期から中期頃まで機能していたと考えられ、中世以降は耕作地化したことが明らかになった。これは、周辺で実施されている既往の調査成果と同様である。

既往の調査では、広範囲にわたる調査によって平安時代前期の建物配置が判明している例もあるが、これらの街区の周囲に位置する側溝や路面といった条坊遺構も、前期の段階に整備されていたことが明らかになった意義は大きい。

なお、試掘調査で確認された埋蔵文化財の措置については、道路施工工事の内容に合わせて補足調査を実施する予定である。

(宇野 隆志)



写真8 1Tr.西端(南東から)

註

- 1) 小楡山一良『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25 (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2007年。
小楡山一良他『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2008年。
小楡山一良他『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14 (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2008年。
南孝雄他『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-22 (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2009年ほか多数。
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1996年。

IV - 1 嵯峨遺跡 No.64

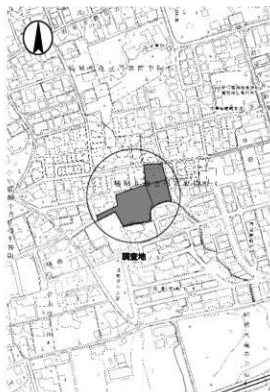


図28 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は右京区嵯峨釈迦堂前裏柳町内で、野宮神社の北方、清涼寺の南西にあたる。この場所は、15世紀の天龍寺周辺の様相を描いた「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図」¹⁾をみると、天龍寺の塔頭である逍遙庵や栄徳庵が存在していたことがわかる。周辺の調査事例としては北方の清涼寺西側で試掘調査を実施しており、15世紀後半頃の土師皿を多量に破棄した土坑を検出している²⁾。しかし、その他の顕著な遺構を検出しておらず、絵図に描かれている諸寺・塔頭の様相は明らかではない。今回このような場所で、宅地造成が計画され、嵯峨遺跡に該当することから試掘調査を実施した。

調査区は新規道路部分を対象とし、1～4Tr.

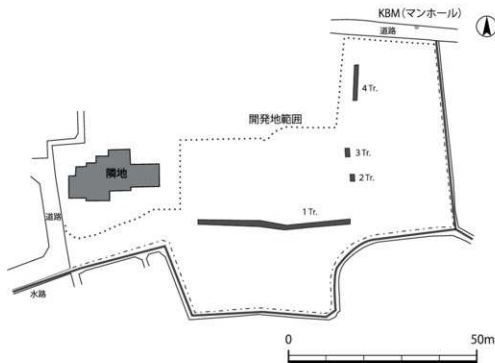


図29 調査区位置図 (1:1000)

を設定した。調査は平成 23 年 4 月 18・19 日に実施、調査面積は 75 m²である。

2 層序と遺構

調査地は田地のため、南東方向に低くなる段丘状を呈しており、最大で約 1.4 m の高低差がある。そのために調査区は段丘をまたぐように西から中央にかけて、1 Tr. (東西方向)、最も低い場所に 2・3 Tr. (南北方向)、やや高くなる北側に 4 Tr. (南北方向) を設けた (図 29)。遺構は池跡と礎石を検出した。

1 Tr. (図 30) 基本層序は、西側・中央・東側で様相が異なる。

西側は旧耕作土以下、地山 (15) となり、地山直上で礎石を確認した。礎石は小さく縁の東を支えていたものと推測することができる。

中央では池跡を検出し、旧耕作土以下整地土 (2)、池埋土 (3～7)、地山 (15) となる。池は暗褐色砂泥 (厚さ 12～72cm) で整地しており、その直下から暗灰黄色泥土、オリーブ褐色砂礫、黒褐色砂泥、暗灰黄色砂泥が堆積する。調査区に限られていることや、東屑を確認することができなかつたため、池の規模を明らかにすることができなかつたが、池の埋土の堆積状況から東西幅は約 17 m 以上を測る。また、汀には景石や小礫はみられず、池底にも粘土を貼り付けた痕跡を確認することができなかつた。一方、東側では池跡を掘削し、耕作地として利用していたようで、旧耕作土以下整地土 (2)、近世の旧耕作土 (10)、地山 (15) となる。

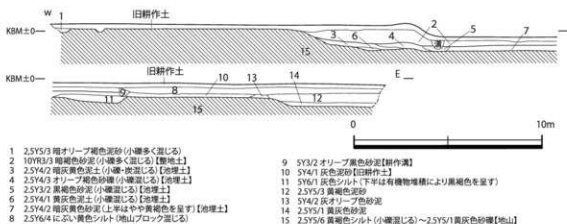


図 30 1 Tr. 北壁断面図 (1 : 200)

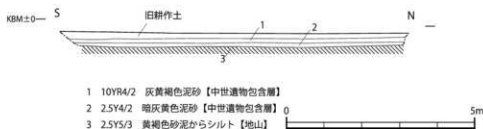


図 31 4 Tr. 西壁断面図 (1 : 100)

2・3Tr. 層序は旧耕土以下暗灰黄色泥砂、灰黄色シルトとなる。暗灰黄色泥砂には遺物を含むが、細片のため時期は不明である。顕著な遺構はみられなかった。

4Tr. (図 31) 基本層序は旧耕作土以下中世遺物包含層 (1・2)、地山 (3) となる。地山は北側に向かって緩やかに傾斜する。顕著な遺構はみられなかった。

3 遺物 (図 32・33)

遺物の種類は土師器皿・須恵器鉢・瓦で、すべて 1 Tr. から出土している³⁾。

土器類 1は2層から出土した東播系須恵器すり鉢である。口径は26cmで、口縁部に自然釉がかかる。外面はヨコナデを施し、内面には使用痕がみられる。編年では京都Ⅶ中である。2は3層から出土した播磨系須恵器鉢である。外面はナデ、内面はケズリを施す。編年では京都Ⅶ中である。3は4層から出土した土師器皿で口縁はナデながらつまみ上げ、やや丸味を呈す。内面は同心円状にナデ、外面の口縁部付近は強いナデを施す。編年では京都Ⅶ古である。4は4層から出土した土師器皿である。口径は7.6cmを測り、内面は丁寧にナデを施す。編年では京都Ⅹ古である。

瓦類 5は剣頭文軒平瓦で4層から出土した。残存状況が悪く全体の文様構成は明らかではない。瓦当裏面から平瓦にかけてヨコナデによる粘土が押し上げられた痕跡がみられる。平瓦凸面はオサエ、凹面には細かい布目と成形台圧痕を残す。時期は13世紀中頃に比定できる。胎土は多量の砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調は黄灰色を呈す。

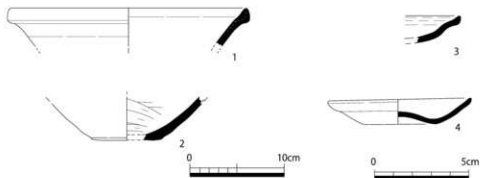


図 32 須恵器 (1・4)・土師器皿 (1・2) 実測図

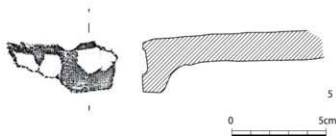


図 33 軒平瓦拓影・実測図 (1:2)

4 まとめ

今回の調査では池跡や礎石を確認することができた。池の規模は、検出した埋土状況から東西幅 17 m 以上を測る。また、2・3 トレンチでは池跡を確認することができなかったため北側へは展開しないものと推測される。池の汀に小礫や景石を据えた痕跡は認められず、池は園池ではなく湧水を利用した溜め池であったことがわかる。池底には植物遺体を含む堆積土はみられず、池が埋め戻されるまでの間、管理されていたものと推測する。

礎石は 1 箇所のみの確認に留まったため、建物規模や池との相関関係は明らかにできなかった。しかし、池埋土及び整地土からは 14 世紀初頭の須恵器鉢・土師器皿（図 32・1～3）や 16 世紀頃の土師器皿（図 32・4）が出土することから、遅くとも 14 世紀には池周辺での土地利用が開始されたものと推測される。調査地周辺は 14 世紀初頭に後醍醐天皇が亀山殿を造営する。鎌倉時代後期の亀山殿を中心とした景観を描いた「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図¹⁾」をみると、数多くの邸宅や寺院が建ち並んでいたことがわかる。当該地の様相はこの絵図に描かれていないが、亀山殿に関連するなんらかの施設が建てられていた可能性が高い。

以上、今回の調査では池を園池として利用していた明確な根拠を見出すことはできなかった。しかし、当該地は邸宅や塔頭が建ち並ぶ地理的条件にあったことを勘案すると単なる溜め池ではなく庭園などの構成要素のひとつであった可能性がある。今後の調査では、これらのことを踏まえ注意深く対応しなければならない。

（鈴木 久史）

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所「京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊、1997 年、図版 58 絵図 2。
- 2) 宇野隆志「V-2 嵯峨遺跡 No. 70」『京都市内遺跡試掘調査報告平成 20 年』京都市文化市民局、2009 年。
(財)京都市埋蔵文化財研究所「史跡・名勝嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11、2005 年。
- 3) 土器編年は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要 第 3 号』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996 年に準じる。
- 4) 註 1 (財)京都市埋蔵文化財研究所に同じ。

IV-2 史跡・特別名勝天龍寺庭園、 史跡・名勝嵐山 No.65



図34 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

天龍寺は暦応2年(1339)8月の後醍醐天皇崩御を受け、その菩提を弔うために、夢窓疎石が足利尊氏に進言し、光厳上皇の院宣を受けて開創されることになった寺院である。康永4年(1345)秋には、夢窓疎石を開山に迎えて後醍醐天皇七回忌法要を兼ね、落慶法要が営まれている。

天龍寺の地は、檀林皇后が創建した檀林寺の跡地で、檀林寺の廃絶後、建長年間に後醍醐上皇が新たに仙洞御所を造営し、次いで亀山上皇が仮御所としていた地であった。

康永元年(1342)には五山の第二位に位置づけられ、翌2年には仏殿、法堂、山門などが完成し、3年には霊庇廟(後醍醐天皇霊廟)も落

成した。さらに観応2年(1351)、疎石は千人収容可能な広大な僧堂を造営している。

天龍寺は創建当初は五山第2位であったが、至徳3年(1386)には京都五山第一位となり、鎌倉建長寺と同格に位置づけられている。その後、足利義満政権下の応永8年(1401)の改定で相国寺が第一位、天龍寺は第二位(鎌倉円覚寺と同格)に格下げされたものの、応永17年(1410)にはまた第一位に戻っている。

天龍寺は創建後、たびたび火災に遭い、その度に再建をおこなっている。まず延文3年(1358)に雲居庵などを除いて焼失したのを始め、貞治6年(1367)、応安6年(1373)、康暦2年(1380)、文安4年(1447)に火災に遭っている。さらに、応仁2年(1468)には、応仁・文明の乱の戦火に巻き込まれ、焼失している。この応仁・文明の乱後の復興は進まず、天正13年(1585)に豊臣秀吉の寄進を受けることにより、ようやく本格的な再建が進められた。さらに慶長19年(1614)、元和元年(1615)、寛永10年(1633)にも徳川幕府から朱印が寄進されている。

復興した伽藍は、文化12年(1815)に火災に遭うものの、翌年には早くも再建が始められている。しかし、元治元年(1864)7月の「蛤御門の変」で長州藩の陣所となったことから、薩摩藩兵を中心とする部隊からの攻撃を受け、天龍寺の再興伽藍の大半が焼失してしまう。

現在の境内景観及び伽藍配置は、明治32年(1899)に法堂、大方丈、庫裡、大正13年(1926)

に小方丈、昭和9年(1934)に多宝殿などが再建されて形成されたものである。

今回の調査は、明治・大正期に再興した庫裡、本玄関等の老朽化が進行し、床の不陸や柱の傾斜が著しいことから大規模修理をすることになり、合わせて寺務所も建て替えることになり、事前に建て替え予定地の地下遺構の情報を得る目的で実施したものである。調査区は、新寺務所が現在の寺務所部分に書院北側の中庭部分を加えた範囲に計画されたことから、

予定範囲内で最も後世の攪乱の少ないと考えられた中庭部分に設定した。調査地の住所は、京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町68(天龍寺)である。遺構確認調査は、平成23年6月20日、21日、22日の3日間おこない、調査面積は16㎡であった。この調査により、建物基壇跡及び江戸時代末の元治の大火で焼失した建物跡を検出することができた。

2 層序と遺構

設定した調査区の位置は、伽藍配置のわかる元禄5年(1692)の「天龍寺境内絵図」(天龍寺所蔵)及び年不詳の「天龍寺参道付近指図」(天龍寺所蔵)をみても建物等の記載のない部分であった。

基本層序は現地表下10～18cmまでは、近現代の盛土及び攪乱土層(①層)である。その下に、厚さ約5cmのにぶい黄橙色砂泥層(②層)があり、この層上面で磚をモルタルで固めた雨落溝が造られる。この層の下位は、後述する石積み基壇を埋めた整地層(④及び⑤層)であり、礎石を据える。炭化物や焼土を含む被災直後の火災処理土坑も検出しており、元治の被災時に相当すると考えられる。この層の下

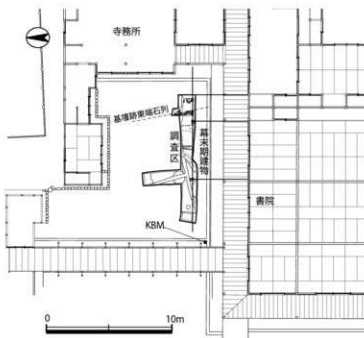


図35 調査区位置図(1:300)



写真9 調査区全景(東から)



写真10 基壇東端石積み(北から)

位は、端部に石積みをする基壇状遺構を形成する黄褐色砂泥層(⑦層)及び地山である明黄褐色砂泥層(⑧層)で、現地表下35cm前後で検出する。地山は東下がり傾斜している。

元治火災建物跡 ④層は、近世の瓦片を含んでおり、上面に焼土が認められるとともに、幕末の遺物を含む火災処理に伴う土坑が掘り込まれていることから、元治の兵火時の被災面と考えられる。この層上では東西に並ぶ礎石2個を検出した。礎石間の距離は4.5mと広いが、現在の書院の柱間と同じ間隔で、両礎石とも現書院の礎石の真北2.6mの位置にある。現書院との配置に類

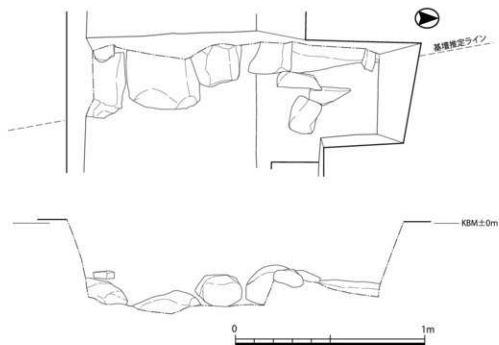


図37 基壇端部石積み平面図・断面図(1:20)

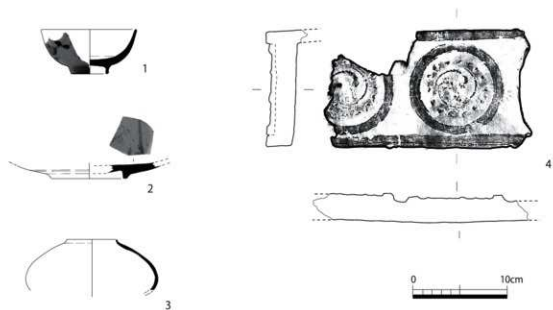


図38 出土土器・瓦実測図(1:4)

似性が認められることから元治の兵火で焼失した旧書院の礎石と考えられる。

建物基壇跡 現地地表下35cmで石積みをもつ基壇状遺構を検出した。この基壇状遺構は現書院の建物方位に対して西に10度振っている。石積みは径25～50cm、厚さ15～30cm程度の自然石の平滑面を東向きにして基壇の端部を形成するように南北に並べられている。さらに、この基壇は一部地山である明黄褐色砂泥層を整地して使っている。なお、この石積みは灰黄褐色泥砂層(⑥層)を掘り込んでおらず、時期的に先行する可能性もある。調査区東端の灰黄褐色泥砂層上面で、不定形に並ぶ10～15cmの自然石を検出したが、その性格は不明である。

幕末火災処理土坑 暗灰黄色泥砂層(④層)を掘りこんで築かれた東西2.4m以上、南北0.9m以上の土坑で、多量の焼土と炭化物を含む。遺物は少ないが、近接する礎石が火を受けており、火災直後に廃材を投棄するために穿たれた土坑と考えられる。

3 遺物(図38)

東西調査区西端断割出土遺物 図化可能なものは、17世紀後半の肥前産と考えられる皿1点(2)と、碗1点(1)である。皿は、高台径8.0cmで内面見込み部分に草文をもつ。碗は口径10cm、高台径4cm、器高4.7cmで、外壁に植物系の文様、高台に2重の圏線をもつ。

暗灰黄色泥砂層出土遺物 石積み基壇を埋めた土である4層から出土した唐津産と見られる無頸壺(3)1点を図化した。口径5.4cmである。

幕末火災処理土坑出土遺物 図化できたのは大棟に使用した道具瓦1点(4)である。この道具瓦は、面戸瓦の上部、小菊丸瓦の位置に取まるものである。巴文の周囲に珠文を巡らした部分は別に瓦当範で型取りしたものを板面に貼り付けたものである。瓦当面は天地幅12.2cm、左右幅が25cm以上である。

4 まとめ

今回の成果としては、元治兵火時の旧書院の礎石、桃山時代以前に遡る可能性のある建物基壇跡、並びに調査区東端の礎群等を検出することができたことである。天龍寺所有の絵図では空白地である場所から、遺構を確認できたことは、中世以降の建物配置が予想以上に複雑であったことを示している。また、従来不明確であった江戸期の書院部分の建築の変遷を確認できたことも成果となる。

一方で、避雷針ケーブルの掘方や、土製排水管の掘方、元治兵火後の火災処理土坑を始めとする複数の廃棄土坑により遺構面は攪乱を受けていることも判明した。

なお、この調査成果を受けて、天龍寺は遺構の保存を最優先にして計画建物の基礎掘削深度を遺構に影響のない深さに設定することとしている。

(馬瀬 智光)

IV-3 大徳寺旧境内 No.67



図39 調査位置図(1:5,000)

1 はじめに

調査地は、京都市北区紫野大徳寺町49-1の一部地で、大徳寺北東方の敷地である。この場所は、大徳寺の子院である高林庵が所在したことが絵図からわかる。高林庵は、片桐貞昌が自らの墓所として寛永15年(1638)に建立し、その後、明治に芳春院に統合されている。

周辺の調査では、大徳寺の玉林院で平成20年度に発掘調査をおこない、近世の柱穴列と平安時代の土坑を検出している。また、同年に大仙院で試掘調査をおこなっているが、慶長以前に遡る遺構や遺物は検出していない¹⁾。これらの調査では、表土直下で地山を検出しており、今回の調査でも、表土直下の地山上面で大徳寺子院関連遺構を検出することが予想された。

このような場所で福祉施設の建設が計画されたため、試掘調査をおこなった。調査時は北側の敷地と南側の敷地に別れており、その間をブロック塀で区切っていた。北の敷地は、南の敷地より約1m低い。したがって、平成23年6月13日(1日目)は北の敷地に(1Tr.)、翌14日(2日目)は南の敷地に(2Tr.)南北方向の調査区を設定した。調査の結果、1Tr.・2Tr.で大規模な濠跡を検出した。しかし、1Tr.で検出した濠と2Tr.で検出した濠がどのような関係があるのか不明であったため、ブロック塀撤去後の11月16・17日に、両調査区をつなぐよう3Tr.を設定した。総調査面積は88㎡である。

2 層序と遺構

基本層序は、現代盛土、近世包含層、にぶい黄褐色シルト(地山)である。1Tr.北端では近世包含層はみられず、現代盛土直下(GL-0.4m)で地山を検出した。2Tr.南端では近世包含層がみられ、GL-1.0mで地山を検出した。北側の敷地と南側の敷地の境界部分では、地山が南から北に下がる状況が確認できたため、現状の段差が近世以前に遡ることが明らかになった。遺構検出は地山上面でおこなった。検出した遺構は濠2条、ピット、溝状遺構、土坑である。

濠1(図40・41) 幅6.5m、深さ3.5mの東西方向の濠である。濠の埋土は4層に大別でき、

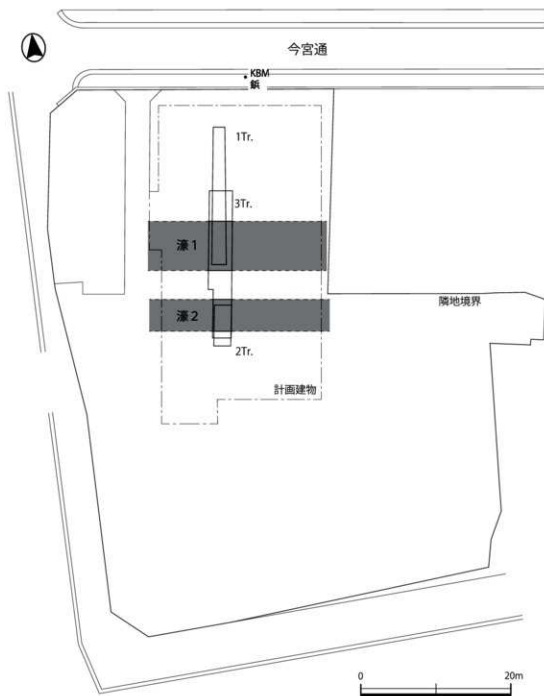


図 40 調査区配置図 (1:500)

それらをⅠ～Ⅳ層とする。

Ⅰ層（7～10）は締まりの悪い泥砂層である。人工的に濠を埋めた最終段階の層である。濠の中央が厚く1.2mある。

Ⅱ層（11）は、にぶい黄橙色シルト（地山）をブロック状に含む層である。濠の北肩が厚く、中央に向けて薄く堆積することから、濠の北から人工的に埋められた層とみられる。

Ⅲ層（12・13）は褐色泥砂層で、濠の南肩が厚く、中央に向けて薄く堆積することから、濠の南から人工的に埋められた層である。出土遺物に時間的な幅がないため、Ⅰ～Ⅲ層は濠を埋め

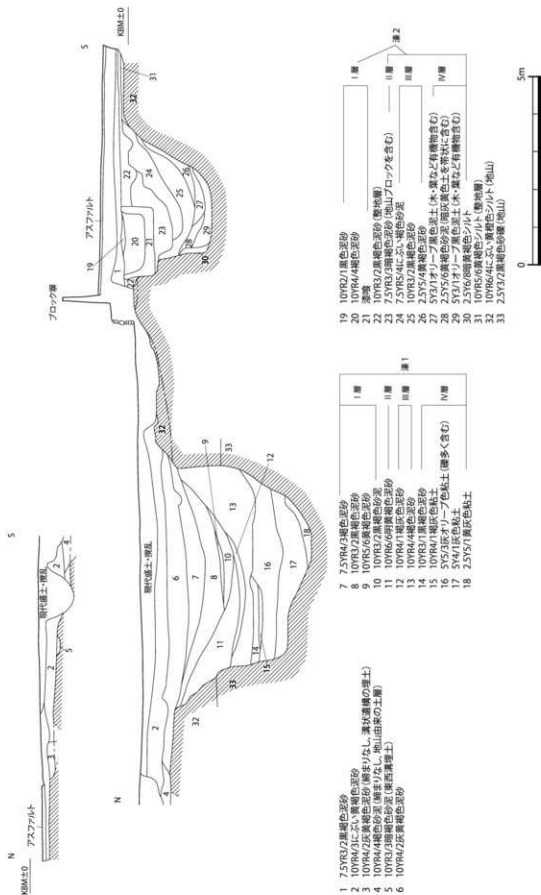


図 41 調査区東壁断面図 (1:100)

る際の工程差の可能性がある。

IV層(14～18)は有機物を多く含む粘土層である。厚さ1.0～1.5mあり、自然に埋まったものと考えられる。

濠2(図40・41)幅4.5m、深さ2.5mの東西方向の濠である。濠の埋土は4層に大別できる。

I層(19～21)は、近世後半以降の層で、19・20層は濠が最終的に埋められた時期のものである。21層は漆喰でつくられた水路状のもので、幅3.0m、深さ0.8mある。近世に埋まった濠(II層)を若干北にずらして掘りなおしたものとみられ、中世につくられた濠を近世後半以降まで踏襲していたことがわかる。

II層(23)は、暗褐色泥砂で地山ブロックを含む。近世前半に濠が埋められた後(III層)、幅約2.5m、深さ約1.0mに掘りなおしており、近世後半に埋まったものとみられる。

III層(24～26)は、にぶい褐色砂泥、黒褐色泥砂、黄褐色泥砂層である。埋土は南から北に堆積しており、人工的に南から埋められたものとみられる。

IV層(27～30)は、有機物を多く含む泥土層で、自然に埋まった層とみられる。北肩底部に溜まるように堆積する30層は、にぶい黄褐色シルト(地山)を多く含んでいることから、地山の土が崩れたものとみられる。

このほか、濠1の北側でピット、溝状遺構、土坑などを検出している。これらの遺構は、埋土に締まりがなく、不整形なものが多い。旧民家に伴う攪乱とともに、今宮通に面して設けられた近代以降の町屋に伴うものと考えられる。

3 遺物(図42)

濠1と濠2から少量であるが遺物が出土した。図示できたのは3点だが、濠1のI層からは近世以降の土師器や染付が、II・III層からは土師器や瓦が出土した。濠2のIII層から巴文軒丸瓦、



写真11 濠1(北から)



写真12 濠2(西から)

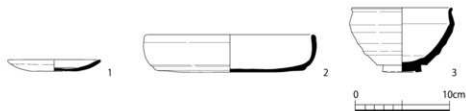


図 42 出土遺物 (1:4)

土師質の甕が出土した。

1は濠1の13層から出土した土師器皿である。口径9.6cmで内面に圈線がめぐる。2は濠1の16層から出土した土師器鉢である。口径18.0cmある大型のもので、内外面ナデ調整を施す。3は濠1の16層から出土した天目茶碗である。

4 まとめ

今回の調査では、大徳寺旧境内北東部の様相が明らかになった。大徳寺旧境内の北端で、東西方向の大規模な濠を2条検出した。外側の濠1は幅6.5m、深さ3.5m、内側の濠2は幅4.5m、深さ2.5mであり、外側のほうが規模が大きい。濠1と濠2は、心々距離で約10.0m、濠1の南肩から濠2の北肩までは約5.0mとなる。濠1が大徳寺旧境内の外濠、濠2が内濠で、その間に土塁状の施設があった可能性がある。ただし、今回の調査では土塁状の施設の痕跡はない。また、濠内からの出土遺物が少なく、2条の濠が同時併存したのか確定できない。

濠1と濠2は埋まりかたに違いがみられる。濠1は一気に埋められており、掘りなおしはみられないが、濠2は近世以降に少なくとも2度掘りなおされている。ただし、濠1・2とも最下層には有機物を含む泥土層があり、当初は併存していた可能性がある。近世前半に人工的に埋められ(濠1のⅠ～Ⅲ層、濠2のⅢ層)、濠2だけ掘りなおされたとみられる。

寛永15年(1638)に高林庵がこの地に建立されたことから、もともと大徳寺の北を限る外濠と内濠であった濠1・2を、高林庵建立時に一旦埋められ、その後境界として濠2が掘りなおされたと考えられる。

今回検出した濠は、大徳寺が中世に自衛のため造営したものである。非常に大規模で、当時の大徳寺の権威を示しているものといえよう。今後、大徳寺縁辺部の調査がある際は濠の存在に注意する必要があるだろう。(家原 圭太)

註

1)京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』2009年。

IV - 4 上京遺跡 No.16



図 43 調査位置図 (1:5,000)

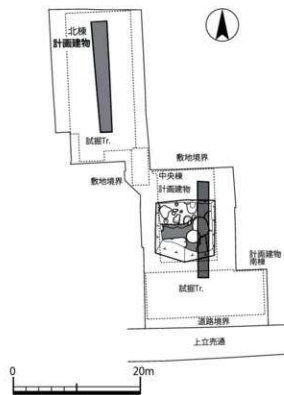


図 44 調査区配置図 (1:600)

1 はじめに

今回の調査は、共同住宅建設計画に伴う試掘調査である。調査地は上京区上立売町・裏風呂町内で上立売通と室町通の交差点の北西側に位置し、上京遺跡の中央付近に該当する。調査地の南東には足利義満が造営した室町殿があったとされ、同志社寒梅館や築山北半町内の発掘調査で、室町殿に関連する堀や塀、景石などを検出している¹⁾。

このようなことから、当該地には室町殿に関連する遺構の検出が予想された。平成23年3月4日に室町殿北西隣接の様相把握を目的とした試掘調査を実施し、北棟計画地では、近世攪乱などによって遺構面が削平されていたが、中央棟計画地で東西方向の溝や室町期の遺物包含層を検出した。検出した溝の規模は大きく、中世の構えの駆跡とみられた。そこで堀の規模やその性格を確認するため試掘調査を延長し、平成23年3月22日から30日まで調査を実施した。調査面積は87㎡である。

2 層序と遺構 (図45)

調査の主目的を室町期の遺構把握としたことから、各遺構面での詳細な調査を実施していない。そこで、断面観察から得た所見を述べる。

調査地が駐車場であったことから、表土に碎石を敷き、平坦にしている。これを除去すると近現代盛土及び攪乱・幕末の焼土堆積が認められる。一部、GL-1.0～1.3mで灰褐色



写真13 完掘全景写真(西から)

シルト～褐灰色粘土層(東壁5・6)の整地土がみられ、江戸時代前半頃の遺構面となる。この遺構面直下で拳大の礫や土師器皿を含む中世遺物包含層が堆積し、地山直上で室町時代の遺構面となる。地山は調査区北端で黒褐色シルトが遺存していたが、その他は砂礫が主体となる。室町時代の遺構面は近代の井戸などによる削平が顕著で

あった。

検出した遺構は近世の井戸・室町時代の溝・柱穴・土坑である。ここでは室町時代の遺構について報告する。なお、遺構番号については通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。

溝5 調査区中央部で東西方向の溝を検出した。近世井戸や土坑によって南肩・東側が削平されており平面形は不明である。溝はやや北側へと振り、東壁断面で確認することができないものの、深さは検出面から0.3～0.4mを測る。溝には多量の土師器皿が破壊されていた。

土坑32 調査区中央西側で検出した土坑である。西半は調査区外へ展開するため平面規模などを明らかにすることができなかつたが、東西0.4m、南北1.2mを測る。溝5と重複関係にある。埋土は暗褐色砂泥で、京都X古に属する土師器皿²⁾が出土した。

土坑12 調査区東端で検出した土坑で、平面規模は東端が調査区外へ展開するため明らかにすることができなかつたが、南北3.1m、東西1.1m以上を測る。溝5・土坑20と重複関係にあり、溝5を埋めた後に掘りこまれている。埋土は黒褐色砂泥で土師器皿の細片が出土した。土師器皿は京都X古に位置づけられる。

土坑20 調査区南東で検出した不整形の土坑で、南北約3.0m、東西2.5mを測る。溝5・土坑12と重複関係にあり、溝5が埋め立てられた後に掘り込まれている。埋土は暗褐色泥砂で礫を多量に含み、土師器皿が出土した。土師器皿は京都IX新～X古に位置づけられる。

柱穴34 調査区中央部、溝5の北肩で検出した底に根石をもつ柱穴である。南北0.8m、東西0.6mの楕円形で、深さ約0.4mである。埋土から土師器皿が出土した。土師器皿は京都IX新～X古に位置づけられる。

柱穴37 調査区中央部、溝5の北肩で検出した柱穴である。南北0.7m、東西0.5m、深さ0.4mである。埋土から土師器皿が出土した。土師器皿は京都IX新～X古に位置づけられる。

3 遺物(図46・47)

調査では整理箱に5箱の遺物が出土した。室町時代の土師器皿が9割を占め、瓦・輸入陶磁器などが1割となる。ここでは、出土量の多い溝5、土坑12・20・32、柱穴34について報告する。

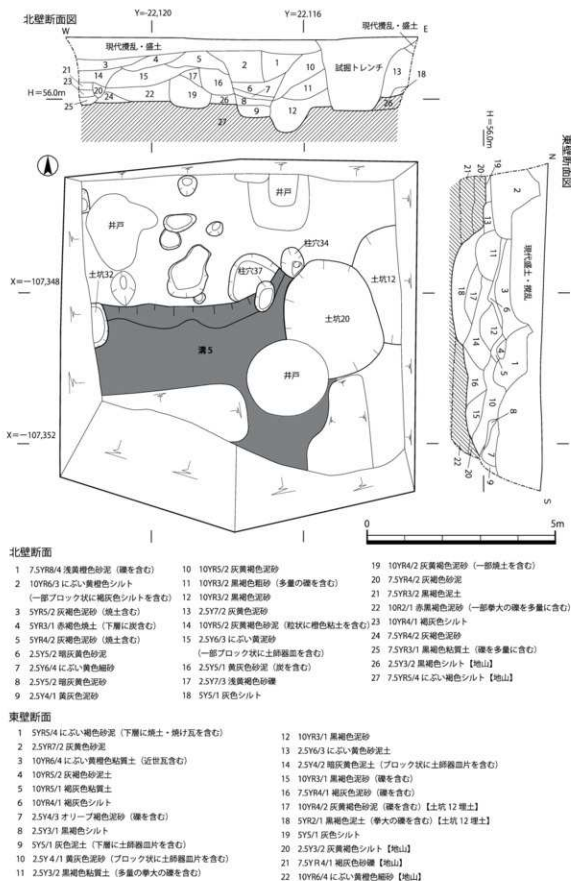


図45 調査区平面・断面図(1:100)

溝5 溝5には多量の土師器皿（1～34）が破棄されており、各部位の形態の組み合わせに様々なバリエーションが認められた。そこで、個々に説明する煩雑さを避けるため、口径（cm）・器高（cm）・体部形態・口縁端部・圏線の有無について表1にまとめた。口径・器高は原則として口縁部が1/4以上残存しているものを掲載することとした。遺物の特徴として、体部は内湾するものと直線的に立ち上がるものが認められた。口縁形態は強いヨコナデを施すため外反するが、再度先端部を調整するためやや丸みを呈する。表1では先端調整を施さず外反するものを表記した。圏線は底部の内部の境目を同心円状にナデを施すため、内側が凸状の圏線となるものがあり、分類した。

出土した土師器皿は口径の大きさから3つの形式に分類することができる。すなわち、口径が7.4～9cmで小型（1～15）、9.2～11.8cmで中型（16～32）、12.2～12.6cmで大型（33～34）となる。小型は口径8.5cm、器高1.5cm前後でまとまりをもつが、中型に関してはややばらつきが認められる。また、同じ法量（19・20）でも底部が丸底と平底となっているものがあり、体部の形態にも相違が認められる。また、調整の特徴

として口縁端部をヨコナデすることによって、先端にやや丸みをもつものが多い。底部圏線の有無は半々であるが、中型・大型のものに数多く認められた。全体的に、胎土に明瞭な違いは認められず、浅黄褐色系を呈し焼成は良い。(23)は口縁の一部の内外面に煤が付着するため、灯明皿と考えられる。なお、口縁の一部を人為的に欠いており、灯芯を固定させていたものと推測することができる。全体としてやや新しい様相も混在しているが京都IX新に位置づけることができ、溝5へ一括廃棄したものと推察できる。

土坑32 土師器皿（35～42）がまとまって出土したが完形となるものはない。丸底の中型皿と平底の大型皿に分けることができる。丸底の中型皿の口径は7.9cm～8.5cm、平底の大型皿の口径は11.2cm～11.8cmにまとまる。出土点数は、丸底の中型皿が8割を占める。京都IX新～X古に属する。

土坑12 土師器皿（43～46）が出土。(43)は口縁が10.2cmを測り平底となる。体部は内湾し、内外面ともにヨコナデを施す。(44)は口径が14cmを測り平底となる。体部は直線と内外面と

表1 溝5出土土師器皿観察表

番号	口径	器高	体部形態	口縁端部	圏線	その他
1	7.4	1.5	内湾			
2	7.8	1.5	直線			
3	8	1.4	内湾			
4	8.2	1.4	内湾			
5	8.2	1.4	内湾			
6	8.3	1.7	内湾	外反		
7	8.4	2.3	内湾			
8	8.5	1.3	内湾			
9	8.5	1.8	内湾			
10	8.5	1.5	内湾			
11	8.6	1.7	内湾			
12	8.6	1.6	直線			
13	8.7	1.9	内湾			
14	8.8	2	内湾		凸	
15	9	1.7	内湾			
16	9.2	2.2	直線		凸	
17	9.6	2	直線			
18	9.8	1.9	内湾		凸	
19	9.8	2.2	内湾			
20	9.8	2.1	直線		凸	
21	10.4	2.4	直線			
22	10.6	2.4	内湾		凸	
23	10.6	2.1	内湾			口縁型
24	10.7	2.3	直線			
25	10.9	2.2	直線		凸	
26	11.2	2.5	内湾	外反		
27	11.2	2.4	直線		凸	
28	11.3	2.1	直線			
29	11.4	2.3	内湾		凸	
30	11.6	2.1	直線			
31	11.8	2.2	直線			
32	11.8	2.4	直線		凸	
33	12.2	2.2	直線	外反		
34	12.2	2.1	直線		凸	

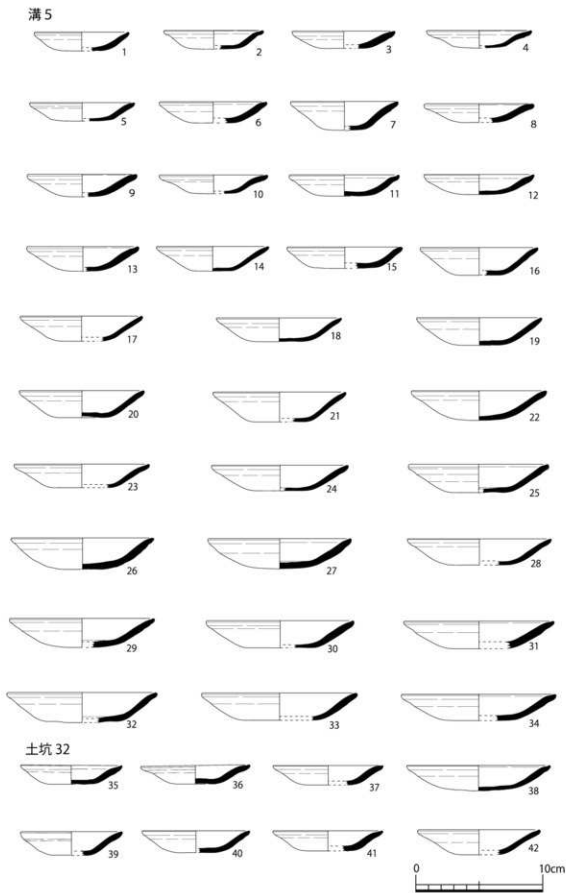
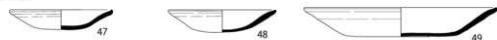


図46 溝5・土坑32出土遺物(1:3)

土坑12



土坑20



柱穴34



図47 土坑12・20、柱穴34出土遺物(1:3)

もにヨコナデを施す。(45)は口径が14.9cmを測り、平底となる。体部は内湾し、内外面ともヨコナデを施す。(46)は口径が15.6cmを測り、平底となる。体部は内湾し、体部は内外面ともヨコナデを施す。京都IX新～X古に位置づけることができるが、全体的に京都X古の様相を示す。

土坑20 土師器皿(47～49)が出土。(47)は口径が8.0cmを測り丸底となる。体部は内湾し、内外面ともにヨコナデを施し、底部に圈線が残される。(48)は口径が8.5cmを測り、丸底となる。体部は内湾し、内外面ともにヨコナデを施す。(49)は口径が15.2cmを測り、平底となる。体部は直線で、内外面ともにヨコナデを施す。京都IX新～X古に位置づけることができるが、全体的に京都X古の様相を示す。

柱穴34 土師器皿(50～51)が出土。(50)は口径が8.2cmを測り、底部がやや凸状となる。体部は内湾し、内外面ともヨコナデを施す。(51)は口径が14.2cmを測る。体部は内湾し内外面ともヨコナデを施す。京都IX新～X古に位置づけられる。

4 まとめ

今回の調査では室町時代の東西溝・柱穴を検出し、多量の土師器皿片が出土した。これらは、室町殿周辺を検討するうえで重要な遺構である。そこで、周辺の発掘成果をふまえ室町時代の遺構の性格について検討する。

柱穴 溝5の北肩で2基の柱穴を検出した。2基のみの検出に留まったが、溝5とほぼ同じようにやや北へ振っていることなどをふまえると、橋脚の一部であった可能性がある。

溝 調査地の南側で検出した溝5は軸が東に対して北へ振る東西溝である。検出面からの深さは、0.3～0.4mと非常に浅く、上面が削平され、底の一部を検出したものと考えられる。南肩が土坑などによって削平されていたことから、平面規模や溝の断面形を明らかにすることは出来なかったが、素掘りの溝である可能性が高い。また、溝埋土の下層からは15世紀後半頃の土師器皿がまとめて出土しており、16世紀頃には埋められたものと推測することができる。ここで注

目したいのが、同志社大学寒梅館および、新町キャンパスの発掘調査成果である³⁾。当該地南東側に位置する同志社大学寒梅館の発掘調査では、室町殿に関連する石敷き遺構や柱穴列とともに軸を北へ振る東西溝を検出している。溝は上端幅2.0m、深さ0.8mを測り、V字の断面形を呈する。さらに、当該地の南西側に位置する同志社大学新町キャンパス内の発掘調査でも、北へ振る幅4.0m、深さ2.0mを測る東西溝を検出している。報告者である鋤柄俊夫氏によると、これら両溝を同一の溝と想定し持明院大路または毘沙門堂大路（上立売通）の南側溝もしくは、上京の街区にかかわる溝としている⁴⁾。そして、出土する土師器皿に年代の齟齬があることから、室町期には室町殿の周りを囲う溝と推測する。今回検出した東西溝の北端は、この推定南側溝から北へ約25mの場所に位置し、基本的な大路幅である8丈（約24m）とほぼ同様の数値を示す。さらに、両溝とも軸がやや北へと振っている。したがって、今回の調査で検出した東西溝も鎌倉期には持明院大路または毘沙門堂大路（上立売通）の北側溝であったものが、室町期に邸宅周辺を囲む溝へと変化した可能性を推察することができる。

時期に関しては、溝5から出土した土師器皿を15世紀末頃に一括で破棄したものと考えられる。築地北半町内の発掘調査でも、15世紀後半頃に東西溝が埋められていたようである⁵⁾。このころの当該地周辺では、足利義尚によって、文明8年（1476）に焼亡した花の御所の再建がおこなわれていた。『大乗院寺社雑事記』には、この時の造営の様相が記載されており、花の御所の敷地は縮小され周辺には小屋などが建ち並んでいたようである⁶⁾。溝5と重複関係にある土坑からは、溝を埋め立てた15世紀後半から16世紀にかけての土師器皿が出土しており、史料の記載にあるように活発な土地利用がおこなわれていた可能性が示唆される。ただし、溝から出土した土師器皿は一括廃棄であることから、足利義尚の室町殿再建に関連して破棄されたものと推測することも可能である。

以上、周辺の調査成果に推論を交えながら本調査で得た知見について考察をおこなったが、区画とした溝が堀として意識されていたのかを明らかにすることができなかった。今後、周辺の調査成果でさらに検討されることを期待する。

（鈴木 久史）

註

- (1) 同志社大学歴史資料館『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書』2005年。(財)京都市埋蔵文化財研究所「44室町殿跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財概要』1994年。
- (2) 土器編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年に準じる。
- (3) 註1同志社大学歴史資料館に同じ。
- (4) 鋤柄俊夫『中世京都の軌跡—道長と義満をつなぐ首都のかたち』雄山閣、2009年。
- (5) 註1(財)京都市埋蔵文化財研究所に同じ。
- (6) 『大乗院寺社雑事記』文明11年3月6日条。

IV - 5 北白川廃寺 No. 72

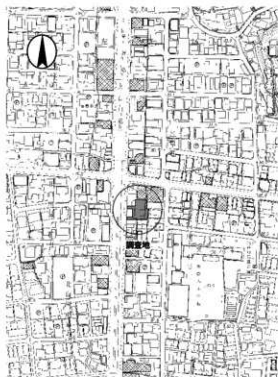


図 48 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、左京区北白川上別当町内で白川通と御蔭通の交差点の南東方にあたる。当該地は、北白川廃寺の南端に位置するが、推定寺域外になる。北白川廃寺は昭和9年に実施された緊急発掘調査によって、東西約36m、南北約23mを測る建物基壇(推定金堂)が発見されて¹⁾以降、昭和49・50年、平成7年の調査²⁾で一辺約13.8mの塔基壇、昭和55年、平成16年に回廊など寺院中心堂宇を検出している³⁾。

一方、御蔭通の南側では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡を検出するとともに、唐三彩・無文銀銭などが出土しており、飛鳥時代から平安時代にかけての集落跡(小倉町別当町遺跡)が展開している⁴⁾。

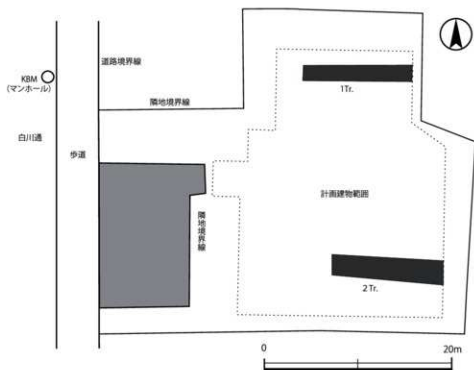


図 49 調査区配置図 (1:400)

今回このような場所に共同住宅の建設が計画されたため、北白川廃寺南側の様相の把握を主目的として、平成23年4月4日に試掘調査を実施した。調査面積は27㎡である。

2 層序と遺構(図50)

調査区は計画建物に沿って北端に1Tr.、南端に2Tr.を設定した(図49)。

1Tr.では4基の土坑と縄文遺物包含層を確認した。基本層序は、現代盛土以下、中世遺物包含層(3・4層)が堆積し、これを掘り下げると中世の遺構面となる(6層)。さらに、調査区東端でおこなった断割りの結果、GL-1.26～1.4mで縄文時代遺物包含層(7層)が堆積していることが明らかとなった。なお、7層はごく一部の確認に留まったため、遺構が成立しているか明らかにすることができなかった。そのため遺物包含層と認識した。遺構検出は6層上面でおこない4基の土坑を検出した。土坑には遺物が含まれておらず、性格などについては明らかにすることができなかった。

2Tr.の基本層序は、1Tr.とほぼ同様で現代盛土以下、中世遺物包含層(2・3層)が堆積し、その直下で遺構面となる暗褐色砂層(4層)を検出した。2Tr.では遺構面は土壌化が著しく、遺構を検出することができなかった。

3 遺物(図51)

出土した遺物は、中世土師器皿や縄文土器であるが、そのほとんどが細片である。ここでは比較的残存状況の良い縄文土器を報告する。なお、縄文土器はすべて1Tr.7層から出土した。

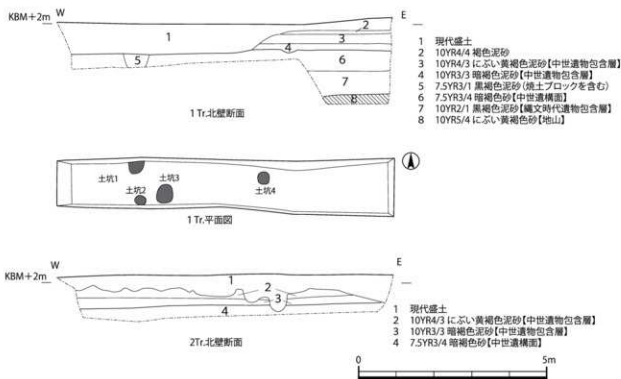


図50 調査区平・断面図(1:100)

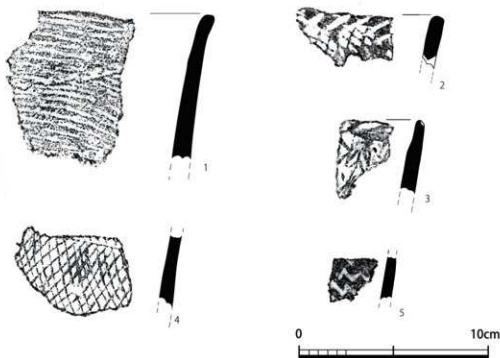


図 51 出土遺物実測・拓影（1：2）

1は深鉢ではあるが破片のため詳細な器形は不明である。外面は燃糸文を施し、内面は横方向にナデを施す。胎土は少量の砂粒と植物繊維を含む。2は深鉢と考えられるが、小片のため詳細な器形は不明である。外面は口縁付近に斜め方向の刻み目を入れ、胴部付近は斜格子文を施し、内面はナデを施す。胎土は砂粒を少量と繊維を含む。下端に補修孔が認められる。3は深鉢ではあるが破片のため詳細な器形は不明である。外面はやや形の崩れた菱形文を施し、内面は口縁付近を横方向にナデを施す。口縁には刻み目を入れる。胎土は少量の砂粒が混ざる。4は深鉢と考えられるが破片のため詳細な器形は不明である。外面は、斜格子を施し、内面は斜め方向にナデを施す。胎土は少量の砂粒と繊維を含む。5は小片のため詳細な器形は不明である。外面は山形文を施し、内面はナデを施す。焼成は硬質で胎土は少量の砂粒を含む。

4 まとめ

今回の調査では、北白川廃寺にかかわる遺構や遺物を確認することはできなかったが、中世の遺物包含層と縄文時代の遺物包含層を検出した。

北白川廃寺の伽藍復元によると、南門は御蔭通より北側に想定されており、当該地は寺域外となる。御蔭通周辺の発掘・試掘調査でも、小倉町別当町遺跡に関連する遺構・遺物の検出事例が多く、住居空間が広範囲にわたって展開していたことがわかる。また、白川通の配水管布設替え工事に伴う立会調査では、中世遺物包含層を数箇所検出しており、広域にわたって活発な土地利用がなされていたことが明らかになっている⁵⁾。御蔭通や山中越えの成立時期がいつ頃まで遡るのかは明らかではないが、上述した調査成果を踏まえると中世には街道沿いとして栄えていた可能性が示唆される。今後の調査に留意する必要がある。

また、部分的な調査であることから縄文時代の遺構を確認することができなかったが、出土した縄文土器は早期の神宮寺式と黄島式の間に該当する。本調査地の北西方で実施した発掘調査では、早期の竪穴住居とともに多量の縄文土器が出土している。出土した縄文土器は、山形文を中心に斜格子文や燃糸文も共存している⁶⁾。本調査では斜格子文(図 51-4)が中心となっているが、上記の調査成果と類似しており、当該地まで集落が展開していた可能性も考えられる。また、斜格子文土器や山形文土器(図 51-5)とともに燃糸文土器が出土していることも留意する必要がある。

ところで、本調査地の北方約 11 m の場所で実施された発掘調査で、縄文時代遺物包含層・無遺物層を貫く噴砂の痕跡を確認し、地震の影響によるものと判断している。さらに、推定北白川廃寺西回廊付近に走る高低差約 1 m の段丘も地震によって形成されたとする⁷⁾。しかし、今回検出した縄文時代の遺物包含層は水平に堆積しており、地山も同様の堆積層を示している。部分的な調査であることから慎重を要するが、地震の影響は御蔭通を境に様相が異なる可能性が考えられる。これまで北白川廃寺は段丘を利用し造営を進めていたことが指摘されている。したがって、造営以前の自然地形は寺域選定にあたって、大きく影響を及ぼしたものと理解することができる。今後、当該地の自然地形の復元を含めた地質学的調査を実施する必要がある。

(鈴木 久史)

註

- (1) 京都府「北白川廃寺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第十九冊』1939年。
- (2) 北白川廃寺発掘調査団・京都市文化市民観光局文化財保護課『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』1976年。
(財)京都市埋蔵文化財研究所「北白川廃寺塔跡」『京都市内遺跡発掘調査概要平成7年』文化市民局、1996年。
- (3) 京都市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所『北白川廃寺跡発掘調査概要昭和56年』1983年。(財)京都市埋蔵文化財研究所「北白川廃寺」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局、2006年。
- (4) (財)京都市埋蔵文化財研究所「小倉町別当町遺跡」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』1996年。
- (5) (財)京都市埋蔵文化財研究所「北白川廃寺」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』1996年。
- (6) (財)京都市埋蔵文化財研究所「北白川廃寺2」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994年。
- (7) (財)京都市埋蔵文化財研究所「北白川廃寺第6次調査」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概要平成2年』1990年。

IV - 6 伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳） No.21

1 はじめに

調査地は、京都市伏見区桃山町永井久太郎56で、藤城小学校の西側に所在する農林水産省近畿農政局淀川水系土地改良調査事務所内である。この場所は、桃山古墳群（永井久太郎古墳）の北東部と伏見城跡の松平伊予守屋敷推定地にあたる。

周辺の調査では、今回の対象地の西隣（同敷地内）で昭和61年度に発掘調査をおこなっており¹⁾、伏見城期の建物遺構や造成土などを検出している。造成土内からは埴輪が出土しており、周辺に古墳が存在したとみられる。また、同敷地内の北東部では擁壁築造のための試掘調査を平成10年度におこなっているが、顕著な遺構や遺物はみつかっていない²⁾。一方、敷地北側では平成10年度に上板橋通の拡幅にともなう発掘調査をおこなって



図52 調査位置図 (1:5,000)

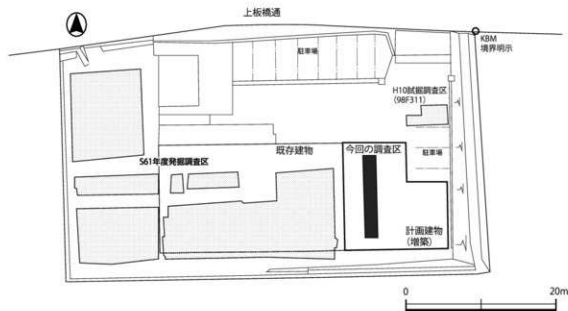


図53 調査区配置図 (1:500)

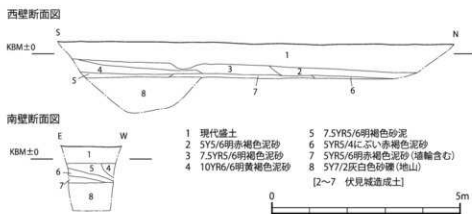


図 54 西壁・南壁断面図 (1:100)

おり、伏見城期の石垣を検出している³⁾。このような場所で事務所の増築が計画されたため、平成 23 年 1 月 25 日に試掘調査をおこなった。調査区は計画建物部分を南北に約 11m 設定した。調査面積は 18 m²である。

2 層序と遺構

基本層序は、現代盛土直下 (GL-0.5m) で伏見城期の造成土 (明褐色泥砂) を検出した (図 54)。この造成土は、東から西に堆積しており、幾層かに分かれることから、造成時の単位とみられる。7 層から埴輪片および須恵器片が多く出土したが、その他の層からは遺物がほとんど出土していない。GL-1.0m 以下は灰白色砂礫層が堆積する。この層は、伏見城期の造成土とは明らかに異なる土で、西隣の発掘調査では検出していない層である。遺物も含んでいないことから地山とみられる。伏見城跡にかかわる顕著な遺構はみられなかった。

3 遺物 (図 55)

出土遺物は、造成土から出土した須恵器と埴輪がある。須恵器は、甕の胴部が数片出土した。埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が出土した。小片のため全体像は明らかではないが、埴輪について特徴の残る破片を抽出し図化した。

口縁部は、端部に粘土をナデつけて突帯状を呈した貼付口縁である (1)。側面には断続的に粘土をナデつけた痕跡が残る、上面と側面は横方向のナデで最終的に整形される。

突帯は、断面が扁平な台形の破片が多くを占めるが、下辺の稜がはっきりせず、断面が三角形に近いものも少量含まれる。透孔は径 5cm 程度の円形である (2)。

底部は、外面端部に平行する木目が密に残り、内面には指頭圧痕が列状に並ぶ (4)。全体の成形後、底部の歪み等を整えるために個体を倒立させて、内面に手を当てながら外面から板状工具で押圧したことによるもので、底部調整と呼ばれる工程である。

器面調整は、外面にはタテハケないしナメハケが一次調整として施され、突帯貼付後の二次

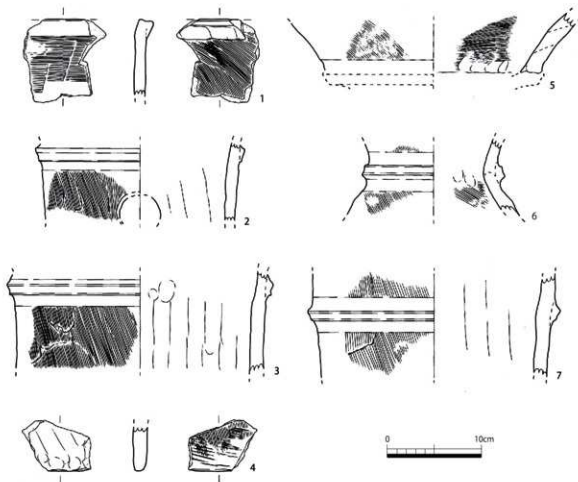


図55 出土遺物(1:4)

調整は認められない。口縁部内面にはヨコハケ、胴部内面には縦方向のナデが全体に施される。

朝顔形埴輪は、口縁部および頸部から肩部にかけての破片が出土した(5・6)。

これらの埴輪には器面に黒斑がなく、硬質に焼成されているものも多い。川西宏幸氏によるV期に分類されるもので、5世紀後葉～6世紀前葉に製作されたと推定できる⁹⁾。

4 まとめ

今回の調査成果から、当該地では伏見城期の遺構面は削平されており、造成土のみが残ったものとみられる。この造成土は、東から西に堆積しており、旧地形を切土・盛土をして堆積状に造成していることが明らかになった。また、造成土から埴輪片が多数出土したことから、周辺に古墳が存在し、伏見城造成時に古墳を削平したことが改めて裏づける成果となった。

(家原 圭太・宇野 隆志)

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1989年。
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度』1999年。
- 3) (財)京都市埋蔵文化財研究所『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年。
- 4) 川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、1978年。

IV - 7 伏見城跡・桃陵遺跡 No.22



図56 調査位置図 (1:5,000)

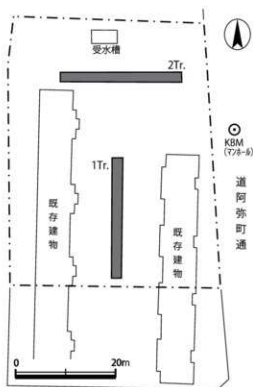


図57 調査区配置図 (1:750)

1 はじめに

調査地は伏見区奉行前町内で、国道24号線と近鉄京都線の間に位置し、かつて伏見奉行所があった所在地の西隣の敷地である。この地は、伏見城創建期には生駒讃岐守の屋敷地に推定され、廃城後は、奉行所が移転して以降は家老屋敷や御用人屋敷が建ち並んでいたと考えられている。明治以降は陸軍駐屯地となり、大正期の都市計画図には陸軍の「作業場」と記載されている。調査地には近年まで、昭和40年代築の国家公務員寮が建っていたが、今は解体され更地となっている。

今回、国有財産の土地活用に伴って事前に地中埋設物調査の計画が挙げられたため、試掘調査を実施した。調査は平成23年3月16・17日に実施し、調査面積は100㎡である。

2 層序と遺構

既存建物の基礎（GL-約1.5m）が埋まった状態にあるため、既存建物間の道路であった箇所（1Tr.）と調査地北側の公園があった箇所（2Tr.）に調査区を設定した。

1Tr.では、北端近くで伏見城期に近い整地層（⑧層）がわずかに残っているが、大半は近世後半以降と考えられる造成土が、浅いところでGL-0.5m、深いところでは-1.9mまで確認された（③～⑤層）。この造成土には、瓦器など伏見城築城以前の遺物も含まれるが、棧瓦などの近世遺物も出土する。伏見城期の遺構面はこの造成に伴って削平されたと考えられる。南端では造成を免れる形で東西溝を検出した。幅約1.5m、深さは検出面から0.4mを測り、上層埋土からは埴輪の破片が少量出土し

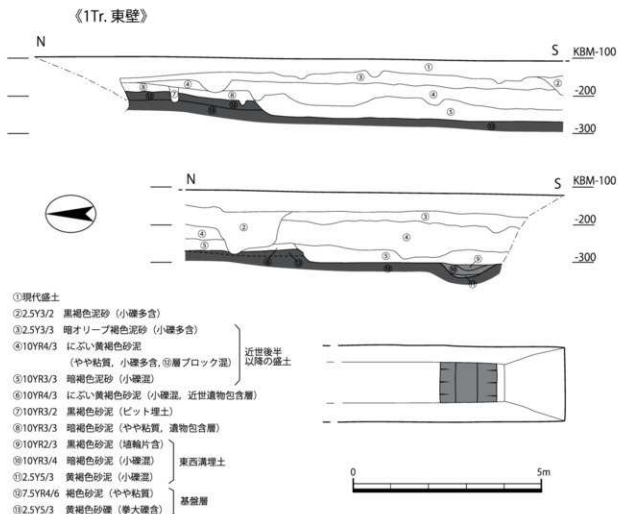


図58 1Tr. 平面・断面図 (1:100)

た。検出範囲が狭いため断定はできないが、古墳の周溝の可能性がある。

2Tr. では、東から西まで基盤層直上まで近世造成土が堆積しており、全体的に削平を受けていた。基盤層上面で複数の土坑やピットが検出されたが、上層の造成土と同じ埋土のものが多く、出土遺物からも確実に伏見城期まで遡るものはない。

なお、この近世後半以降の造成については、奉行所時代の奉行所改築等に伴う大規模工事が想定されるが、調査地が東面の南北道路より一段低くなっていること、周辺の調査で確認されている鳥羽・伏見の戦いに伴う焼土層や焼瓦等が全く認められないことから、陸軍駐屯地の時期に再び大規模な造成を受けている可能性も考えられる。



写真14 1Tr. 南端 東西溝 (北西から)

3 遺物

両調査区からは棧瓦などを含む近世の遺物が、伏見城期以前の小片遺物とともに比較的多く出土しているが、大半は造成に伴う包含層からの出土である。そのなかで注目されるのが、1Tr.南端で検出した東西溝の上層(⑨層)から出土した埴輪片である。

埴輪片は朝顔形埴輪の頸部の破片で、肩部と頸部の境界にめぐる突帯が残り、頸部の半ば付近まで残存する。明褐色を呈し、器壁の厚さは約0.8cmとやや薄い印象を受ける。頸部の外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが調整される。ほかに円筒埴輪の胴部の小片もあり、いずれも硬質に焼成されている。以上の特徴から、出土した埴輪は川西宏幸氏によるIV期に位置づけられ¹⁾、5世紀中葉～後葉に製作されたと推定される。



図59 遺物実測図(1:4)

4 まとめ

調査の結果、調査地においては近世後半以降に大規模な造成がおこなわれたため、伏見城期やそれ以前に形成されていた遺構面が大きく削平されていたことが明らかになった。造成の時期を絞り込むことはできないが、調査地の土地利用歴からすれば、斜面地における平坦面の確保という目的で造成がおこなわれた可能性が高い。こうした状況のなか、埴輪を含む東西溝の検出は特筆される。

調査地より300m程南で昭和63年度に実施された発掘調査でも、今回の調査と同時期に位置づけられる埴輪片が方形埴輪の周溝より出土している²⁾(この調査を機に「桃陵遺跡」が伏見城跡以前の集落遺跡として埋蔵文化財包蔵地に周知)。隣接して弥生時代の方形周溝墓が数基検出されたことから、方形周溝墓の周溝の凹みに埴輪が廃棄されたと報告されているが、弥生時代の墓域と重複する範囲に古墳時代中期の墓域が形成されていたとも理解できる。両調査地から出土した埴輪が示す5世紀中葉～後葉の時期は、京都市内やその周辺地域で集落の隣接地に小規模墳で構成される墓域が顕在化する時期に相当する。以上の推測に基づけば、当該期に造墓活動をおこなっていた集落の居住域が、調査地周辺に展開している可能性が高い。伏見城跡下層の集落遺跡である桃陵遺跡の実態についても、今後の調査で明らかにされることを期待したい。

なお、今回の調査で検出した遺構は当面の地中保存が図られるため、発掘調査は実施されることなく工事が進められる予定である。将来的な開発に対しては、その内容に応じた保存措置が講じられることとなる。

(宇野 隆志)

注

- 1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1978年。
- 2) 小森俊寛他「伏見城跡3」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1993年。

IV - 8 福西古墳群 No.90

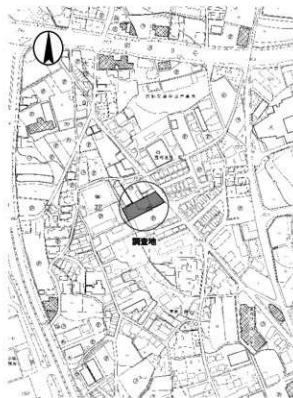


図60 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、京都市西京区大枝東長町 1-206で、国道9号線と福西本通交差点の南東約250 mの位置である。この場所は、福西古墳群の北半に該当する。

周辺の調査では、北隣接地で平成4年に試掘調査をおこなっており、横穴式石室(31号墳)¹⁾を検出している²⁾。また、北西隣接地では平成3年に立会調査で横穴式石室(30号墳)を検出している³⁾。これらの古墳は、設計変更などにより地中保存されている。このように、周辺では多くの古墳が見つかっており、今回の敷地にも未発見の古墳が存在する可能性が想定された。このような場所で共同住宅の建設が計画されたため、平成23年11月24・25日の2日間、試掘調査をおこなった。

調査地は、東側に面する道路と同レベルで、

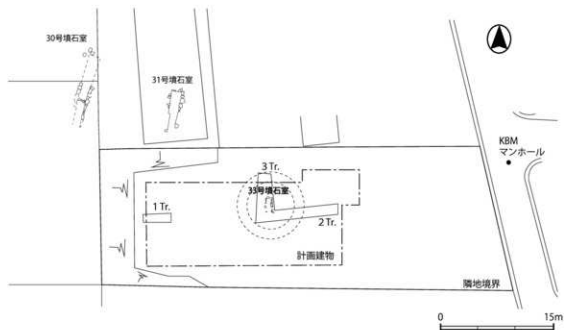


図61 調査区配置図 (1:500)

西隣接地とは約3.0 mの段差がある。周辺の地形から推測すると、敷地西端約10 mは厚い盛土の可能性があったため、それを確認するため敷地西端から東へ1 Tr.を設定した。また、計画建物にあわせて2 Tr.を東西方向に約11.0 m設定し、検出遺構の状況からL字状に3 Tr.を南北方向に約5.0 m設定した。調査面積は21 m²である。

調査の結果2・3 Tr.で古墳の石室を検出した。設計変更により遺構が保存されるため、石室内の部分的な断割調査にとどめ、土嚢で埋め戻した。新発見の古墳であり、福西古墳群33号墳とする。

2 層序と遺構

1 Tr.では、GL-2.0 mまで盛土であることが明らかになった。重機の制約により、それ以上の掘削はできなかったが、西隣接地と同レベルまで盛土である可能性が高い。

2 Tr.の基本層序は、現代盛土、近世以降包含層、古墳時代包含層、地山である。調査区の東端では、GL-1.1 m、西端ではGL-1.8 mで地山を検出した。旧地形を踏襲し、西になだらかに傾斜していることが明らかになった。2 Tr.西端付近で20 cm程度の石が出土した。断面観察の結果、古墳の石室石材の可能性があったため、北に拡張(3 Tr.)した。

3 Tr.では、2 Tr.で確認した近世以降包含層の直下(GL-1.7 m)で古墳の石室を検出した。無袖の横穴式石室で、内法で幅0.6 m、長さ1.8 m以上の規模となる。石室内東半を断割調査し

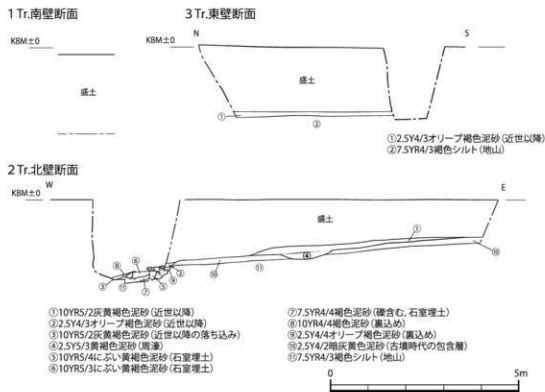


図 62 1～3 Tr. 断面図 (1:100)



図 63 33号墳平面・立面図 (1:20)

た結果、須恵器の杯と蓋が2セット、刀子1点が原位置で出土した。

検出した遺構は、古墳の石室と周溝の可能性のある溝である。

石室 2 Tr.の西端で石室の石材を検出したため、3 Tr.を北に設定し、石室全体の把握をおこなった。検出した石室の規模は、幅0.6m、長さ1.8m以上の南北方向の横穴式石室である。2 Tr.の南壁には石室がみられないため、長さは3.0m以上にはならない。側石は数箇所抜き取られている。比較的残りの良好な東側石に沿って断割り調査をおこなった。その結果、良好に残っているところで、2段分の側石を検出した。石室の直上には近世以降の包含層がみられることから、上面は削平されたものとみられる。また、石室の石が崩れ、原位置を保っていない石もみられた。床面からは須恵



写真15 石室検出状況(南から)

器と刀子が出土した。また、床面には小礫が敷かれていたが、詳細な検討はできなかった。石室内西半には、副葬品が残っているとみられるが、設計変更で遺構が残るため、石室埋土の掘削はそれ以上おこなっていない。

周溝 2 Tr.の東から5.0mの壁面で検出した溝状の遺構である。幅1.5m、深さ0.2mで埋土は、黄褐色泥砂である。石室との位置関係から古墳の周濠の可能性がある。石室から約4.5m東方にあり、周濠なら直径約9.0mの古墳とみられる。遺物は出土していない。

3 遺物

図示した遺物(図64)は全て、石室東半断割り時に床面から出土した。

1～4は須恵器杯・蓋で、1と2、3と4がセットで出土した。1は須恵器杯G蓋である。宝珠形のつまみがあり、口縁部内面にはかえりがみられる。器高3.2cmである。2は須恵器杯G身である。口径8.7cm、器高3.2cmで、底部はヘラギリする。3は須恵器杯G蓋である。つまみ部分が欠損している。4は須恵器杯G身である。口径8.8cm、器高3.3cmで、底部はヘラギリする。これらの土器は、7世紀前半のものである。

5は鉄製刀子である。刃部は完存しているが、茎部分が欠損している。残長は12.0cmである。全体に錆が付着しており、部分的に錆ぶくれがみられる。刃部長は8.7cmであり、刃部先端が反りあがる。茎部分に柄の木部が若干残存する。

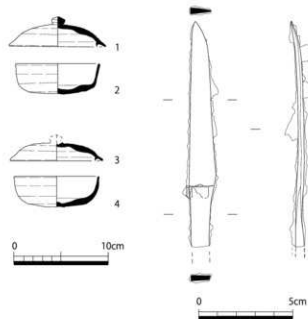


図64 出土遺物1～4 (1:4), 5 (1:2)

4 まとめ

今回の調査では、これまで知られていなかった埋没古墳(33号墳)を新たに発見したことが最大の成果である。

石室の残存状況は良くないが、その規模はほぼ推定できる。幅1.2m、長さ2.2～3.0mの無袖の横穴式石室である。2Tr.で検出した溝状遺構が円墳の周溝であったとすると、周溝心で直径約9.0m

5の古墳となる。この古墳の石室には羨道がなく、出土遺物も七世紀前半とみられることから、北側の調査でみついている古墳よりも新しい。30号墳とは約

30.0m、31号墳とは約18.0mの距離にあり、墳丘の規模が不明であるが、かなり古墳が密集していることがわかる。

当該地の周辺には多くの古墳が分布しており、今後新たに周辺で開発行為がある場合は注意が必要である。

(家原 圭太)

註

- 1) 本報告における古墳番号は、宇野隆志「IV-8 福西古墳群 No.111」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』2008年による。
- 2) 玉村登志夫「福西28号墳 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局、1993年。
- 3) 吉村正親「福西22号墳(90MK10)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局、1992年。

IV - 9 鳥羽離宮跡 No.96

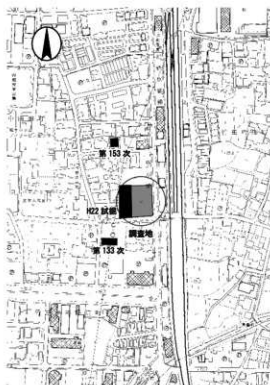


図65 調査位置図 (1:5,000)

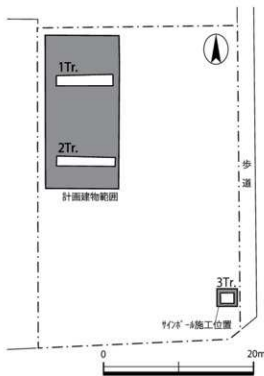


図66 調査区配置図 (1:500)

1 はじめに

調査地は近鉄京都線竹田駅の南西、伏見区竹田中内畑町内で、近衛天皇陵や安楽寿院境内の東側に位置する旧畑地である。

これまでに鳥羽離宮跡では数多くの調査が実施され、膨大な調査データが蓄積されている。広範囲に及ぶ鳥羽離宮跡のうち、調査地のすぐ西側に位置する東殿は、11世紀末に造営が開始され、中島を伴う園池を囲むように御塔や阿弥陀堂などの建物が配置されたことが判明している。

今回の調査地は鳥羽離宮跡として埋蔵文化財包蔵地に周知されている範囲の東端にあたり、離宮として展開した範囲を確認する上で重要な位置にあたる。これまで鳥羽離宮第133次、第153次発掘調査¹⁾のほか、平成22年には西隣の敷地で行った試掘調査(京都市内遺跡試掘調査報告平成22年度No.21)²⁾において、鳥羽離宮東殿の東縁部の整備状況を示す礎敷遺構を確認している。

今回の試掘調査は店舗建設に伴うもので、主要な調査目的として周辺で確認されている礎敷遺構の施工範囲の確認が挙げられる。調査は平成23年5月13日に実施し、調査面積は22㎡である。

2 層序と遺構

鴨川旧河道に向かって遺構が希薄になっていくという想定のもと、店舗計画範囲では東西方向に調査区を設けた(1・2Tr.)。また、サインポール計画地点にも調査区を設定した(3Tr.)。

基本層序は、現代耕作土、旧耕作土(近世～近代、②～⑤層)、腐植土層(平安末期～鎌倉初期遺物包含、⑥層)、無遺物層(砂礫、⑦層)であり、

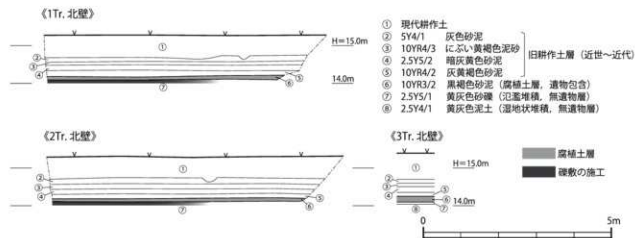


図 67 調査区断面図 (1 : 100)

旧耕作土層以下は西隣の調査と同様の堆積状況を示す。

1Tr. 及び 2Tr. とともに、遺物を包含する腐植土層直下にあたる河川堆積の⑦層上面には、西隣調査同様、礫敷きが認められた。検出レベルは 14.1m で、西隣調査と同一レベルである。ただし、平らな面を上にしてタイル状にほぼ隙間なく敷き詰められていた西隣調査の礫敷きと比較して、礫の密度がやや疎らで、両調査区ともに東半部分には人為的に施工されたと判断できるような礫敷きは認められなかった。つまり、調査地西辺の土地境界から約 6m 以東には、礫敷きが施工されなかった状況が復元できる。

さらに、調査地南東端に設定した 3Tr. では礫敷き面に相当する⑦層が確認された。礫敷きはないものの、1Tr. 及び 2Tr. の⑦層のレベルとほぼ同様のレベルで検出した。断ち割ったところ、⑦層の下からは湿地状堆積がみられた (⑧層)。



写真 16 2Tr. 全景 (東から)

3 遺物

平成 22 年に実施した西隣接地の試掘調査と同様に、礫敷き遺構上面から平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺物 (土師器, 瓦など) が出土したが、いずれも小片で図化できるものはない。遺物の破片は小さく、出土量が格段に少ないことから、礫敷き遺構の検出状況とともに、遺跡の周縁部の状況を如実に示している可能性が考えられる。

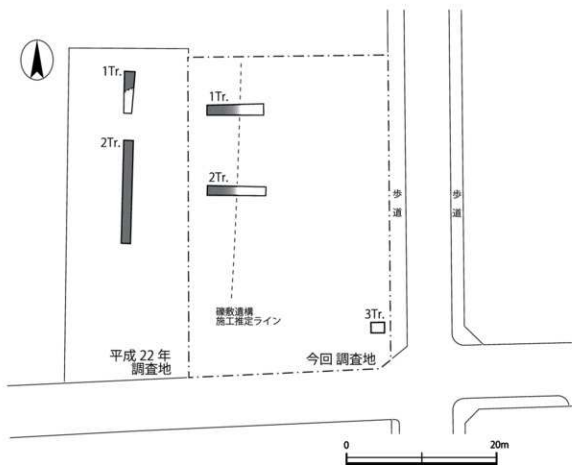


図 68 礎敷遺構施工範囲復元図 (1:500)

4 まとめ

調査の結果、周辺における既往の調査と同様に、調査地にも礎敷遺構及び鳥羽離宮期の池状堆積が展開していることが明らかになった。離宮縁辺部の整備状況を示す遺構として位置づけられる礎敷遺構は、東に向かうにしたがって次第に希薄になることを確認することができた。一方、上層の池状堆積は礎敷遺構の施工範囲よりもさらに東方にまで展開し、水平に堆積する砂礫の基盤層上に薄く堆積する。今回の調査は、鳥羽離宮跡の東縁部における旧地形の復元材料を得るとともに、遺跡範囲をより明確に把握することができたという点でその意義は大きい。

なお、試掘調査後の設計担当者との協議の結果、設計変更がおこなわれたため、発掘調査は実施されることなく、検出遺構の地中保存が図られることとなった。(宇野 隆志)

註

- 1) 山本雅和「第133次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局, 1990年。
長戸満男「鳥羽離宮跡153次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局, 2011年。
- 2) 宇野隆志「鳥羽離宮跡2」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局, 2011年。

V 試掘調査一覧表

平成22年度1月～3月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	朝堂院跡・聚楽遺跡	上京区千本通丸太町下る 主税町1167	1/6, 7	GL-0.3 (TP42.6m) で昌福堂基壇西縁延石抜き取り溝を検出。本文3頁。	22㎡	10K406

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
2	三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡	中京区富小路通御池上る 守山町156-3	2/2	GL-1.2mで平安時代末～中世の土坑を検出。発掘調査を指導。	71㎡	10H213
3	四条一坊十三町跡	中京区壬生坊城町3-1	1/27	GL-1.0mで平安時代の遺構面を検出。発掘調査を指導。	25㎡	10H366
4	九条三坊四町跡・烏丸町遺跡	南区東九条下殿田町2-1, 2-2, 2-4, 2-5	2/21	GL-1.1mで地山を検出。顕著な遺構なし。	40㎡	10H456

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
5	二条二坊五町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京笠殿町164	2/18	GL-1.1mで平安時代の整地層を検出。平安時代～中世の土坑を数基検出。	13㎡	10H392
6	三条三坊十四町跡	中京区西ノ京桑原町3, 西ノ京月輪町32-1	1/5	1Tr. GL-1.1m, 2Tr. -1.1m, 3Tr. -1.0m, 4Tr. -1.2m, 5Tr. -1.0～1.2m, 6Tr. -1.0～1.2m, 7Tr. -1.1mで遺構面が良好に遺存していることを確認。設計変更を指導。本文13頁。	192㎡	09H491
7	五条三坊六町跡	右京区西院南井御科町6-1, 6-2	2/14	GL-0.7mで黄褐色砂泥の基盤層。上面で平安時代の柱穴列を検出。発掘調査を指導。	19㎡	10H435
8	六条二坊三町跡・西大宮大路跡	下京区西七条赤社町地内	3/14	GL-1.1mで西大宮大路西側溝を検出するも、大半は既存建物による擾乱。本文23頁。	35㎡	06H199
9	六条三坊十一町跡	右京区西院西清崎町11	1/20	GL-2.0～2.5mまで擾乱。遺構は残存していない。	16㎡	10H407
10	七条二坊十一町跡・衣田町遺跡・西市跡	下京区西七条比輪田町33, 34	3/7	一部でGL-0.7mで遺物包含層を確認したが、以下無遺物層となり大部分が削平を受けている。	41㎡	10H497
11	七条三坊八町跡	右京区西京極北庄境町62, 63, 68	1/26	中世の土坑を検出するも、遺構密度はきわめて希薄。	39㎡	10H387
12	七条四坊二町跡	右京区西京極町ノ坪町8	1/19	旧耕作土下で、湿地状堆積。GL-1.6mで砂礫の無遺物層。	10㎡	10H384
13	九条四坊十六町跡	南区吉祥院大河原町33他	3/9	GL-0.8mで河川氾濫による堆積（無遺物層）を確認。	68㎡	10H433

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
14	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町17, 25-2, 32-2	2/7～10	調査区西端丘陵部GL-0.6mで室町時代後期の整地面、-0.9mで室町時代前期の整地面を確認。	126㎡	22N049

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
15	相国寺境内・上御堂遺跡	上京区烏丸通上立売上る 相国寺門前町647-20他	1/17	解体覆乱により遺構は残存せず。	73㎡	10S256
16	上京遺跡	上京区上立売町22-1, 裏 鳳呂町349-3	3/4, 22 ～25, 28～30	室町時代の区画溝を確認。本文41頁。	87㎡	10S469
17	上京遺跡	上京区元誓願寺通大宮東 入寺今町513	3/22	GL-0.6mで室町時代の整地層、-1.0mで地山を検出。地山上面で室町時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	44㎡	10S458

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
18	知恩院境内	東山区新橋通大和大路東 入林下町	3/30	GL-0.4mで阿弥陀堂創建時の可能性がある整地層を一部で確認。ただし、遺構面の残りは悪い。	22㎡	10S489
19	中臣遺跡	山科区勧修寺西金ヶ崎 419, 420	1/31	東半GL-1.1m、西半-1.5mで基盤層。旧安祥寺川に向かって下る河岸段丘の一部。	23㎡	10N281
20	中臣遺跡	山科区勧修寺西金ヶ崎 417, 418, 419	1/31	GL-0.6mで基盤層。古墳時代の土坑、柱穴を確認。	26㎡	10N426

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
21	伏見城跡・桃山古墳群(永井久太郎古墳)	伏見区桃山町永井久太郎56	1/25	GL-0.5~1.0mで伏見城の造成土を検出。本文52頁。	18㎡	10F398
22	伏見城跡・桃殿遺跡	伏見区奉行前町4-2	3/16, 17	GL-0.5~1.9mで基盤層を確認。調査地の大半が近世後半以降に大きな削平を受ける。本文55頁。	100㎡	10F429
23	稲荷山古墳群・伏見稲荷大社境内	伏見区深草額成町25-2, 深草洲土町108の一部	2/15	GL-0.3mで灰色系粘土の地山を確認。顕著な遺構なし。	6㎡	10S472
24	伏見稲荷大社境内	伏見区稲荷御前町73-2他	2/23	1Tr.ではGL-1.8m, 5Tr.では-1.1~1.3mで地山を検出。顕著な遺構・遺物なし。	20㎡	10S481

島羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
25	島羽離宮跡	伏見区竹田東小屋ノ内町100	2/16	GL-0.5~1.0mで砂礫の基盤層。顕著な遺構なし。	28㎡	10T447
26	島羽離宮跡・島羽遺跡	伏見区中島島羽離宮町6, 7, 8, 9	3/1	GL-1.5mで平安時代中~後期の整地層を確認。遺構面が深いため、遺跡は地中保存。	17㎡	10T394

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
27	長岡京左京二条四坊四・五・六町跡・三条四坊一・八町跡	伏見区久我西出町6-1・2・3・4・5・6・7・8・9, 63	1/11~13	GL-1.9mで長岡京期の遺構を確認した。発掘調査を指導。	129㎡	10NG151

平成23年度4月~12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
28	兵庫寮跡	上京区一条通御前通東区町24-1・7・8・9・14	4/21	GL-0.7mで褐色砂泥の基盤層。調査区の大半で近世土取り穴を確認。	18㎡	10K464
29	主殿寮跡・聚楽第跡	上京区智恵光院通日暮東入新白水丸町462-13の一部, -51の一部	9/8	GL-0.8mで聚楽第期の整地層を確認。土坑, 溝, 集石遺構を確認。-1.0mで基盤層。	14㎡	11K194
30	大蔵省跡	上京区千本通一条下る二丁目御前町65, 千本通東区西富仲町686-2	6/6	GL-1.7mで基盤層を検出。	32㎡	10K537
31	内裏跡・聚楽第跡	上京区出水通知恵光院西入田村備前町232, 236	12/8	GL-2.0~2.3mまで現代・近世盛土が堆積。	14㎡	11K331
32	右兵衛尉跡	上京区下立売通七本松西入西東町342, 342-3	11/9	GL-0.6~0.8mで平安時代の整地層, -0.8~1.4mで砂礫の地山, -1.4m~聚楽土を検出。	23㎡	11K302
33	朝堂院跡・聚楽遺跡	中京区聚楽別業町10	8/8	GL-0.8mで近世遺物包含層, -1.0mで地山を確認。	44㎡	11K218
34	朱雀門跡	中京区西ノ京小堀町1-4, 7, 7-1	8/24	GL-0.4~1.0mで地山を検出。	40㎡	10K517

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
35	北辺四坊一町跡・公家町遺跡	上京区京都御苑3	9/5~7	1・2・3・6Tr.では, GL-0.1m, 4・5Tr.では, -0.2mで遺構面が良好に遺存。発掘調査を指導。	26㎡	11H193
36	二条二坊三町跡・二条城北遺跡	上京区丸太町通黒門東入薬師町536-60	9/29	GL-0.6~0.8mで基盤層。基盤層上面で平安時代の条坊遺構が良好に残る。発掘調査を指導。	55㎡	11H182
37	三条二坊七町跡・堀川御池遺跡	中京区御池通堀川西入池元町408-1他	12/19, 20	GL-0.7~1.0mで地山を検出。掘削・土取り穴が多く遺構の残存状況は悪い。	84㎡	11H307
38	四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡	中京区東洞院通三条下る三文字町217, 217-1, 220, 222	10/20	GL-1.8mで地山を検出した。地山では, 中世の遺物を大量に含む土坑を確認。	29㎡	11H105
39	五条二坊十三町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区東中筋通高辻下る舟屋町672, -1, -2, -3, 678, 680	5/18	大半が現代掘削。顕著な遺構・遺物なし。	29㎡	10H531
40	五条三坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区山王町557-1, 2他	11/7~9	GL-1.2~2.1mで中世・平安時代の遺構を多数検出。取扱い協議中。	106㎡	11H239

V 試掘調査一覧表

41	六条一坊十一町跡	下京区中堂寺前田町26	7/21, 22	GL-0.4mで土取穴、-0.5mで地山を検出。	41㎡	11H013
42	六条三坊十一町跡	下京区諏訪町通五条下る上諏訪町294-6、294-7・梅梅通室町東入横諏訪町303-1、-2、-4	10/26	GL-2.0mで平安時代の河川跡を検出。その直上には室町時代の湿地状堆積がみられる。	51㎡	11H237

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
43	二条三坊八町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京春日町8	5/9, 10	GL-0.2mで、柱穴や溝などの平安期の遺構群を検出。発掘調査を指導。	84㎡	10H507
44	二条四坊一町跡	右京区花園中御門町2、-13、-14	12/26	GL-0.3mで黄褐色シルトの基盤層。上面で平安時代の遺構を多数検出。発掘調査を指導。	34㎡	11H223
45	四条二坊三・六町跡・西初負小路跡・壬生遺跡	中京区壬生酒田町14, 15	7/13	GL-0.7～1.2mで平安時代遺構面。前期の遺構群が良好に遺存する。設計変更を指導。本文18頁。	54㎡	11H116
46	四条四坊六町跡・山ノ内遺跡	右京区山ノ内山ノ下町12の一部、-4の一部、-5	11/21	GL-0.7mで地山を検出。顕著な遺構や遺物なし。	22㎡	11H226
47	五条二坊十一町跡	右京区西院三蔵町47-4, 48	9/28	GL-0.5mで基盤層。平安時代の溝等を確認したが、攪乱が多い。	31㎡	11H259
48	五条四坊一町跡・山ノ内遺跡	右京区西院日照町4他	7/25～27	旧耕作土直下、GL-1.2～1.8mで基盤層。近世の土取穴を多数検出。	256㎡	11H056
49	五条四坊十五町跡・西京極遺跡	右京区西院東貝川町59-1	9/20	GL-0.8mで地山を検出。地山上面で遺構を検出。発掘調査を指導。	45㎡	11H167
50	六条三坊十四町跡・西京極遺跡	右京区西院六反町23, 24, 25-1の一部、25-2の一部	7/19	GL-0.9mで落込みを確認。	15㎡	11H102
51	六条四坊二町跡・西京極遺跡	右京区西院清水町167	6/2	GL-0.3mで弥生時代の溝や飛鳥時代以降の流路状遺構を検出。詳細分布調査報告平成23年度を参照。	34㎡	11H017
52	六条四坊五町跡	右京区西京極勝勝町6-1, 2, 3	10/12	GL-0.8mで地山を検出。	23㎡	11H262
53	七条二条十二町跡・西市跡・衣田町遺跡	下京区西七条北衣田町49他	11/30	GL-0.2mで褐色シルトの基盤層を検出。ただし、既存建物による攪乱が顕著。	20㎡	11H241
54	七条二坊十四町跡	下京区西七条名倉町16, 西七条比輪田町17-1、-2、-4	10/27, 28	GL-0.2～0.3mで地山。町南北中軸や東寄りで平安時代前半の南北溝を検出。	164㎡	11H244
55	七条三坊七町跡	右京区西京極南庄境町46, 49, 50	6/16	GL-1.0mで平安時代以降の湿地状堆積を確認。	28㎡	11H092
56	八条二坊五町跡	下京区梅小路西中町10-1、-2	10/31	GL-0.8mで弥生時代の流路を1条確認。	26㎡	11H145
57	九条三坊六町跡	南区吉祥院西ノ庄猪之馬場町1, 2	4/14	GL-1.3mで無遺物層の砂礫を確認。顕著な遺構なし。	26㎡	10H499

大塚地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
58	大塚馬塚町遺跡	右京区大塚南日町21-1	5/23	GL-0.3mで近代以降の耕作土、-0.4mで地山を確認。	18㎡	11S009
59	大塚馬塚町遺跡	右京区大塚宮ノ前町40-1、-9、-10の各一部	9/1	GL-0.5～0.7mで褐色砂泥の基盤層。中世の土坑1基検出。遺構密度は希薄。	18㎡	11S217
60	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	右京区大塚西峰岡町9-1他	4/12	GL-0.4mで黄褐色シルトの基盤層。上面でビット等数基を検出するも、遺構密度はきわめて希薄。	41㎡	10S416
61	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	右京区大塚西峰岡町9-1他	4/11, 10/6	GL-0.6mで中世の土坑などを検出。遺構密度は希薄。	124㎡	10S491
62	嵯峨遺跡	右京区嵯峨島居本仏納田町16	10/6	GL-0.2～0.3mで地山を検出。	53㎡	11S270
63	史跡名勝嵐山・嵯峨遺跡	西京区嵐山嵐山17-2の一部、24-1	11/10	GL-0.8mまで耕作土。その下層で氈氈堆積。	8㎡	23N011
64	嵯峨遺跡	右京区嵯峨駅芝堂門前裏柳町16、16-1	4/18, 19	GL-0.3mで礎石建物、池を検出。本文27頁。	75㎡	10S459

65	史跡及び特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町68	6/20, 21, 22	GL-0.1~0.2mで近世の遺構面。-0.4mで中世の遺構面。石積をもつ基礎状遺構を検出。本文31頁。	16㎡	22N079
66	梅津坂本町遺跡	右京区梅津坂本町28-3他	4/27	GL-1.8~2.0mで洪水堆積。顕著な遺構、遺物なし。	44㎡	10S450

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
67	大徳寺旧境内	北区紫野大徳寺町49-1の一部、113の一部	6/13, 14, 11/16, 17	GL-0.2~0.7mで地山を検出。中世~近世の東西濠を2条検出。本文36頁。	88㎡	11S061
68	上京遺跡・寺ノ内旧城	上京区堀川通寺之内上る2丁目下天神町650-1	8/10	GL-0.3mで中近世土坑、-0.6mで基盤層を検出。	9㎡	11S041
69	上京遺跡	上京区武者小路通室町東入梅屋町466、今出川通室町東入今出川町326-5	10/24	GL-0.6mで室町時代の土坑を検出。	66㎡	11S153
70	植物園北遺跡	北区上賀茂豊田町1-1, 1-2	8/2	GL-1.0m以下、基盤層。顕著な遺構、遺物なし。	28㎡	11S206
71	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1-2 (ノートルダム学院小学校)	10/14	GL-0.9mで黄褐色シルトの基盤層。基盤層上面で遺構が良好に遺存。発掘調査を指導。	71㎡	10S135

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
72	北白川庵寺	左京区北白川北別当町6-1, 6-7, 7-4	4/4	GL-0.3mで遺物包含層。-1.4mで縄文土器を含む遺物包含層を検出。本文48頁。	27㎡	10S538
73	池田町古墳群	左京区北白川下池田町92-7	11/28	GL-0.7mで中世遺物包含層。-1.1mで地山を検出。	14㎡	11S354

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
74	法興院跡	中京区鉦田町300他	11/28	GL-1.8mで黒褐色砂礫の基盤層を検出。直上まで近世以降の盛土が堆積。	26㎡	11S261
75	知恩院境内	東山区新堀通大和大路東入林下町	6/27	1Tr.でGL-0.2mで中世整地層。2Tr.は瓦廃棄土坑、盛土のみ。	13㎡	10S489
76	寺町旧城・御土居跡	下京区河原町通四条下る二丁目稲荷町318-6, 334-3, 寺町通四条下る貞安前之町614-13, -53他	11/10, 14~16	御土居内側にも存在するとされる溝。近世~現代土坑墓群。中世の土坑、柱穴、溝を検出。発掘調査を指導。	390㎡	11S324
77	六波羅政庁跡	東山区馬町通大和大路東入下新シ町339-2他	10/13	GL-0.8mで地山を検出。顕著な遺構・遺物なし。	16㎡	10S521
78	六波羅政庁跡	東山区大阪町364, 367, 370, 372, 375	7/4	GL-1.2mで、河川堆積の無遺物層を確認。その上層は近世遺物包含層。	15㎡	11S088
79	妙法院境内	東山区東大路通汐谷下る妙法院前側町440	8/11	GL-0.7mで地山を検出。	6㎡	11S020
80	法性寺跡	東山区本町十五丁目749他	5/26	GL-0.2mで基盤層。遺構面は大幅に削平。	29㎡	10S218
81	中臣遺跡	山科区東野森野町21他	7/11	GL-1.2~1.5mで青灰色シルトの基盤層。顕著な遺構、遺物なし。	41㎡	11N064

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
82	伏見城跡	伏見区桃山町三河56-6, 57-9, -10, 68	12/5	斜面地を削りだし、平坦地を造成。	76㎡	11F292
83	伏見城跡	伏見区桃山筑前町31-2・桃山町松平筑前38	4/14	GL-0.6~0.7mで基盤層。基盤層上面で、溝、落ち込みを検出。	56㎡	11F008
84	伏見城跡	伏見区奉行町5	12/7, 8	3Tr.で伏見城期の整地層。基盤層上面で遺構を多数確認。発掘調査を指導。	23㎡	11F294
85	向島城跡	伏見区向島善阿弥町41, 42, 43, 50, 51, 73-2, 75-2, 80	8/26	GL-1.8mまで掘削し、顕著な遺構・遺物なし。	21㎡	11S187
86	法界寺旧境内	伏見区日野西大道町9-2他	9/26	GL-0.8mで褐色砂泥混じりの基盤層。基盤層上面で小規模な柱穴数基を確認。	29㎡	11S221

V 試掘調査一覧表

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
87	史跡名勝嵐山	西京区嵐山中尾下町	4/28	GL-0.5m~1.0m以下、流水堆積による包含層、-1.4mで巨礫を含む砂礫層。顕著な遺構なし。	30㎡	23N006
88	勝持寺境内	西京区大原野南春日町	6/22, 23	1Tr. 西端, 2Tr. 北端, 3Tr. で15~16世紀の造成土と土留めの石積みを確認。発掘調査を指導。	48㎡	09S243
89	福西古墳群	西京区大枝東長町1-210の一部	11/24	GL-0.8mで地山を検出。	25㎡	11S320
90	福西古墳群	西京区大枝東長町1-206	11/24, 25	GL-1.3mで古墳を検出。設計変更を指導。本文58頁。	21㎡	11S255
91	中久世遺跡	南区久世大藪町26-2他	8/04	GL-0.5~0.6mで黄褐色シルトの基盤層。顕著な遺構、遺物なし。	112㎡	11S128
92	大藪遺跡	南区久世殿城町544	10/11	GL-0.3mで中世・弥生時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	40㎡	11S197

島羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
93	唐橋遺跡	南区唐橋川久保町6-1	5/16	GL-1.0mで地山を検出。礫敷きの斜行溝を検出。	34㎡	10S530
94	下三栖城跡	伏見区横大路下三栖辻堂町49, 70他	11/22	GL-1.3mで中世遺物包含層を確認。	26㎡	11S306
95	島羽離宮跡	伏見区竹田真掃木町114の一部	6/8	旧耕土以下、湿地堆積。	10㎡	11T018
96	島羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町145	5/13	GL-1.2mで礎敷遺構を確認。設計変更を指導。本文63頁。	22㎡	11T057

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
97	長岡京左京一条四坊十六町跡	伏見区久我石原町7-15	8/22	GL-1.4mで地山を検出。顕著な遺構・遺物なし。	21㎡	11NG214
98	長岡京左京二条三坊十二町跡・鶏冠井遺跡	伏見区久我西出町3-1	10/17	GL-1.2mで灰色シルト～砂泥の基盤層と中世耕作層を検出。	47㎡	11NG202
99	長岡京左京四条三坊四町・五条三坊一町跡	伏見区羽東師菱川町180-1	9/15	GL-0.7mで平安時代の流路を検出。	36㎡	11NG203
100	長岡京左京八条二坊十三町・八条三坊三・四・六・七・十町・九条二坊十六町跡・水垂築山城跡	伏見区淀水垂町	4/18~22, 25, 26	KBM-5.0~6.0mの深さで中世の遺物包含層を検出。	651㎡	10NG488
101	長岡京左京九条三坊十三町跡	伏見区淀本町215-2, 218, -3, -5, 211-9の一部, -14の一部, -15, -17の一部, -18, -22	4/6	GL-1.2mで河川堆積を確認。	28㎡	10NG108

表2 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内 訳	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱数 合計
点数及び箱数	269点 (5箱)	縄文土器5点, 埴輪8点, 土師器154点, 須恵器23点, 黒色土器1点, 緑釉陶器2点, 灰釉陶器1点, 陶磁器類16点, 瓦質土器3点, 瓦類63点, 石製品1点, 金属製品1点, 銭貨1点	2箱	19箱	26箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・宇野隆志・家原主太・西森正晃・鈴木久史							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会馆内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2012年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町					
平安宮朝堂院跡 聚楽遺跡	京都府京都市上京区 王祿町1167	26100	2	35度 01分 02秒	135度 44分 37秒	2011/1/6,7	22	作業所
平安京右京三条二 坊二町 西大宮大路跡	京都府京都市中京区 西ノ京南町65	26100	1	35度 00分 44秒	135度 44分 12秒	2010/12/14	18	店舗
平安京右京三条三 坊十四町 西ノ京遺跡	京都府京都市中京区 西ノ京南町32-1	26100	1	35度 00分 43秒	135度 43分 34秒	2010/2/5, 6/21 2011/1/5	192	店舗
平安京右京四条二 坊三・六町 西鞠負小路跡 壬生遺跡	京都府京都市中京区 壬生瀬田町14, 15	26100	1	35度 00分 15秒	135度 44分 03秒	2011/7/13	54	店舗
平安京右京六条二 坊三町 西大宮大路跡	京都府京都市下京区 西七条赤土町地内	26100	1	34度 59分 51秒	135度 43分 56秒	2011/3/14	35	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮朝堂院跡 聚楽遺跡	宮殿跡・集落跡	平安時代・古墳時代		扁扁堂基壇礎石抜取溝		土師器・瓦・凝灰岩片		
平安京右京三条二 坊二町跡 西大宮大路跡	都城跡	平安時代		溝		土師器・須惠器・瓦		地中保存
平安京右京三条三 坊十四町跡 西ノ京遺跡	都城跡・散布地	平安時代・弥生～古墳時代		柱穴・溝		土師器・須惠器		地中保存
平安京右京四条二 坊三・六町跡 西鞠負小路跡 壬生遺跡	都城跡・散布地	平安時代・弥生～古墳時代		西鞠負小路側溝・柱穴		土師器・須惠器・瓦		地中保存
平安京右京六条二 坊三町跡 西大宮大路跡	都城跡	平安時代		西大宮大路側溝		土師器・須惠器・瓦		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606-8342 京都市左京区岡崎曼勝寺町13 京都館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2012年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
嵯峨遺跡	京都府京都市石京区 嵯峨駅追分門前 裏柳町16,16-1	26100	937	35度 01分 11秒	135度 40分 20秒	2011/4/18・ 19	75	宅地造成
史跡及び特別名勝 天龍寺庭園 史跡・名勝嵐山	京都府京都市石京区 嵯峨天龍寺芒ノ馬場町68	26100	A801 A809	35度 01分 0秒	135度 40分 19秒	2011/6/20・ 21	16	建物修理
大徳寺旧境内	京都府京都市北区 紫野大徳寺町49-1の一部、 113の一部	26100	167	35度 02分 39秒	135度 44分 44秒	2011/6/13・ 14 11/16,17	88	福祉施設
上京遺跡	京都府京都市上京区 上立売町22-1,裏嵐呂町349-3	26100	224	35度 01分 50秒	135度 45分 24秒	2011/3/4, 22~25, 28~31	87	共同住宅
北白川廃寺	京都府京都市左京区 北白川上別当町6-1,-7,7-4	26100	397	35度 01分 59秒	135度 47分 35秒	2011/4/4	27	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
嵯峨遺跡	寺院跡	鎌倉～室町時代		礎石建物・池		土師器・須恵器・瓦		
史跡特別名勝天龍寺庭園 史跡名勝嵐山	史跡・名勝			建物跡・土坑		陶磁器		保存
大徳寺旧境内	寺院跡	鎌倉～江戸時代		地業・土坑		土師器・陶器・瓦		
上京遺跡	都城跡	中世		溝		土師器・須恵器・瓦		
北白川廃寺	寺院跡	奈良前期～鎌倉時代				土師器・須恵器・縄文土器		

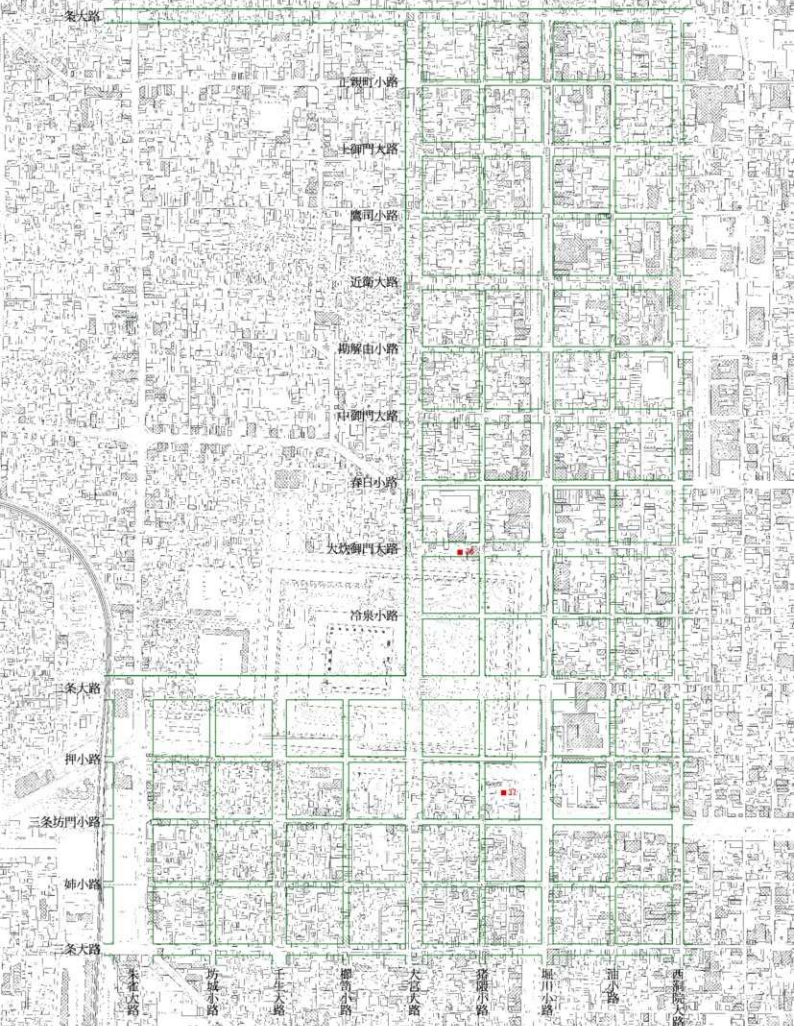
報告書抄録

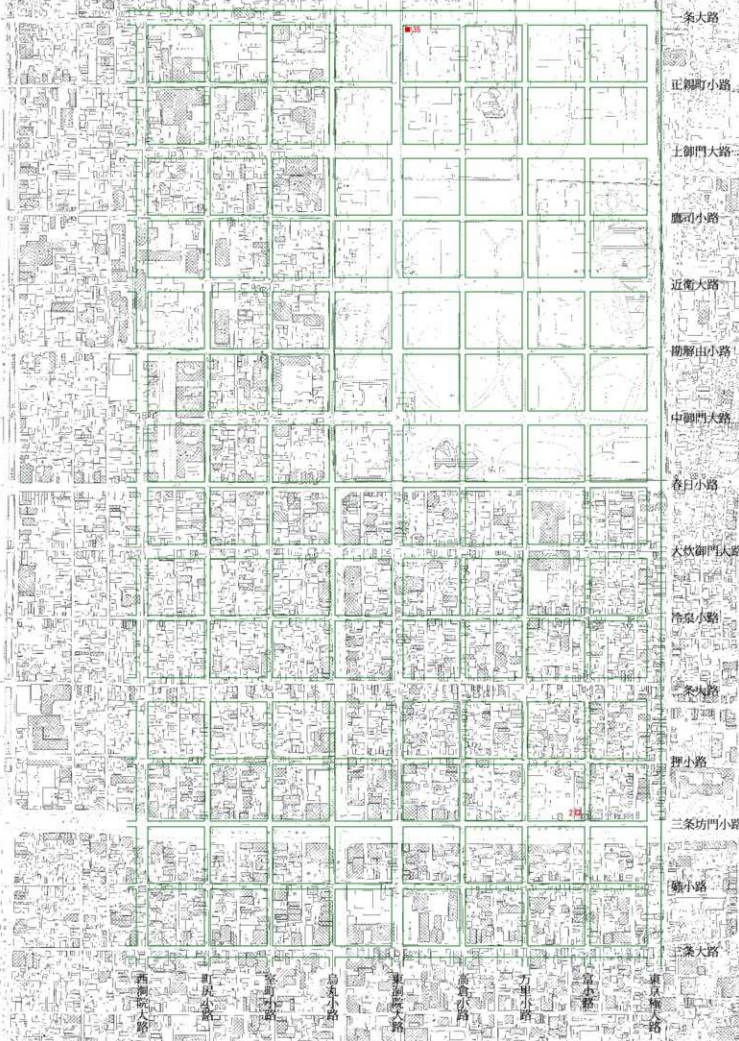
ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会馆内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2012年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町					
伏見城跡 桃山古墳群 (永井久太郎古墳)	京都府京都市伏見区 ももやまちょうなにいせきくつちょう 桃山町永井久太郎56	26100	1172	34度 56分 31秒	135度 46分 29秒	2011/1/25	18	事務所
伏見城跡 桃屋遺跡	京都府京都市伏見区 うづまきまち 奉行前町4-2	26100	1172 1181	34度 55分 50秒	135度 45分 51秒	2011/3/16 - 17	100	地中埋設物調査
福西古墳群	京都府京都市西京区 おおいまがしがらみ 大枝東長町1-206	26100	1009	34度 58分 9秒	135度 40分 33秒	2011/11/24 - 25	21	共同住宅
島羽離宮跡	京都府京都市伏見区 たけなかつちゅうまほら 竹田中内畑町145	26100	1166	34度 57分 8秒	135度 45分 20秒	2011/5/13	22	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
伏見城跡・桃山古墳群	城跡、古墳	桃山時代・古墳時代				須惠器・埴輪		
伏見城跡・桃屋遺跡	城跡、集落跡	桃山時代・弥生・奈良～鎌倉時代		溝		埴輪		
福西古墳群	古墳	古墳時代後期		古墳		須惠器・鉄製品		地中保存
島羽離宮跡	離宮跡	室町時代後期		礎敷遺構		土師器・瓦		地中保存

图 版

凡 例

- 平成 23 年 1 ～ 3 月 試掘調査地点
- 平成 23 年 4 ～ 12 月 試掘調査地点





一条大路

正親町小路

上御門大路

藤司小路

近衛大路

堀河由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

冬大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

一条大路

東大橋大路

富少路

万平小路

高倉小路

東御門大路

烏丸小路

登殿大路

町見小路

酒洲大路



三条大路

六条小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

櫻梅小路

六条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

藤町小路

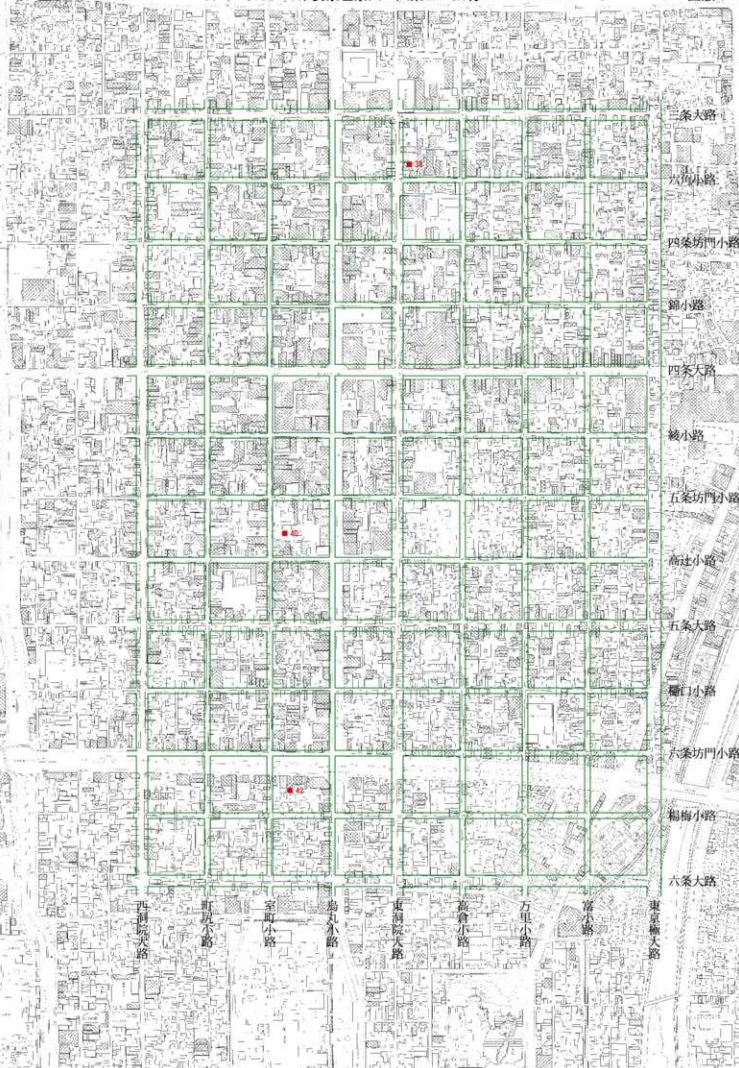
大省大路

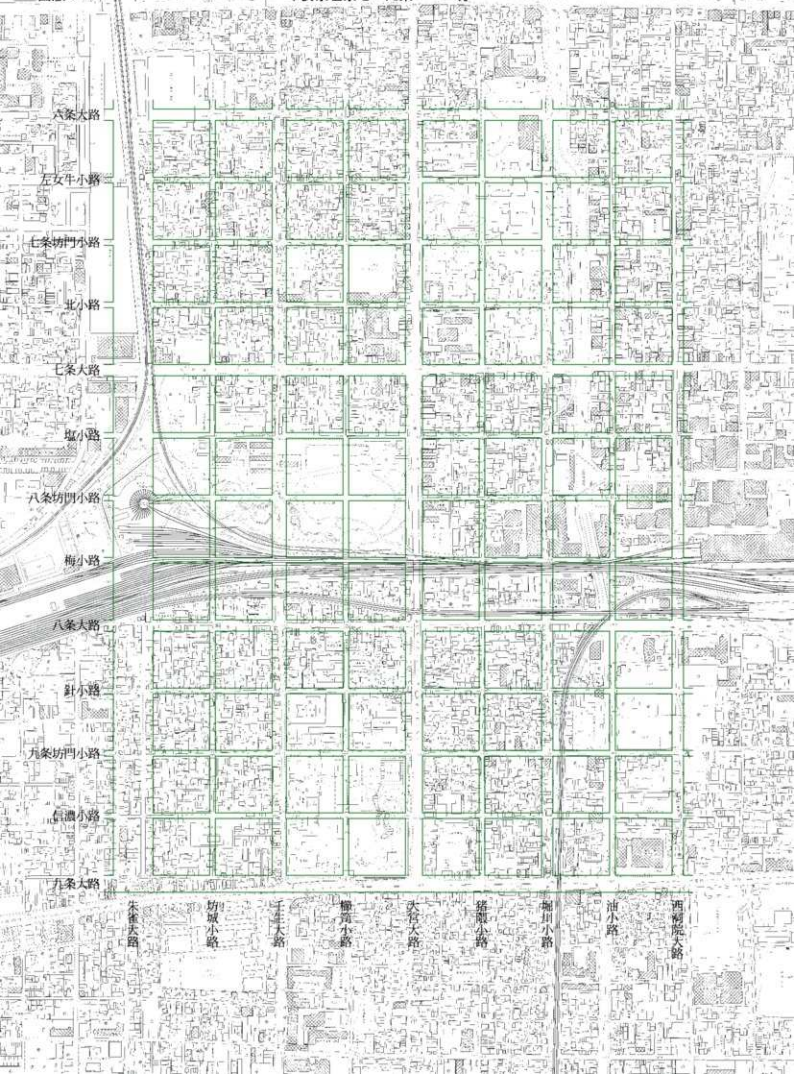
猪隈小路

藤川小路

油小路

西側院大路





八条大路

五女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

春濃小路

九条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫻河小路

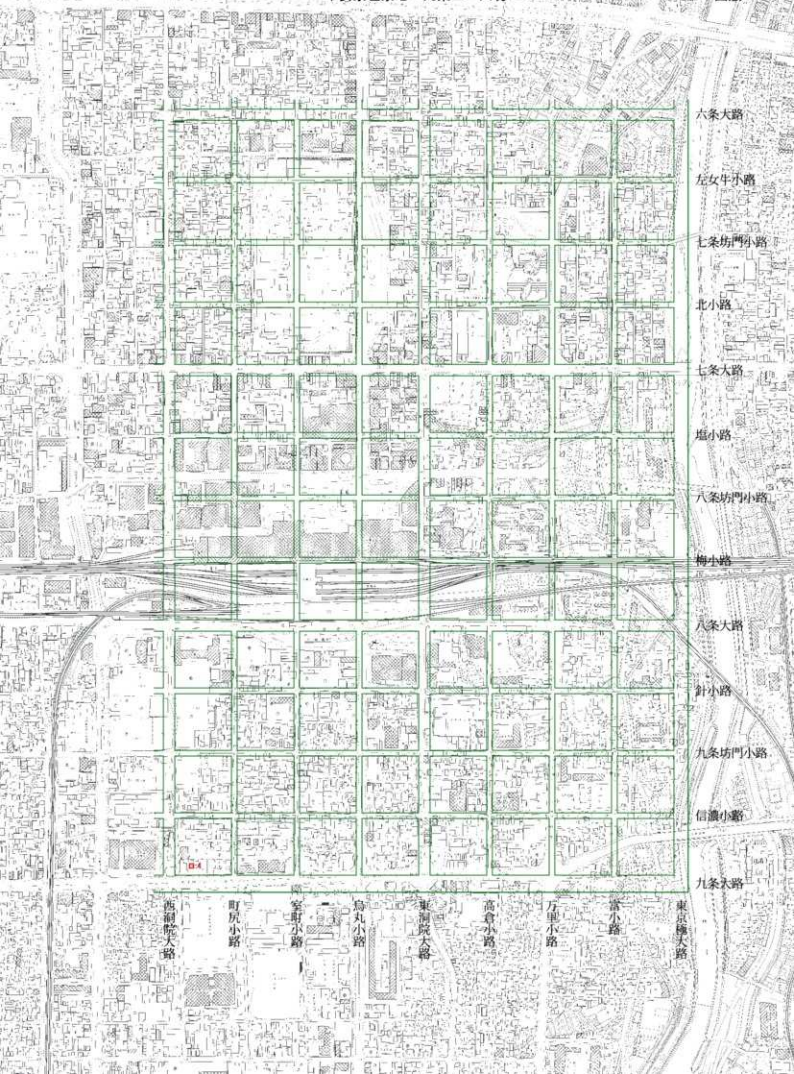
大宮大路

猪殿小路

堀川小路

油小路

西福院大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

東山橋大路

當小路

万里小路

高倉小路

兼利院小路

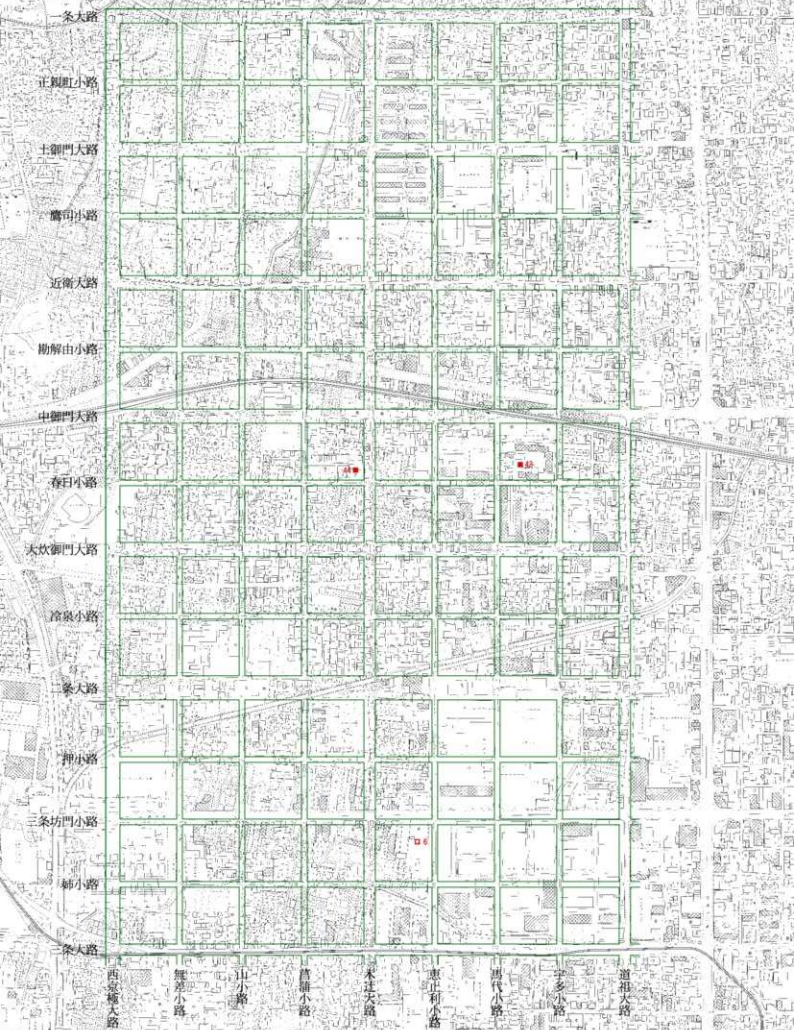
烏丸小路

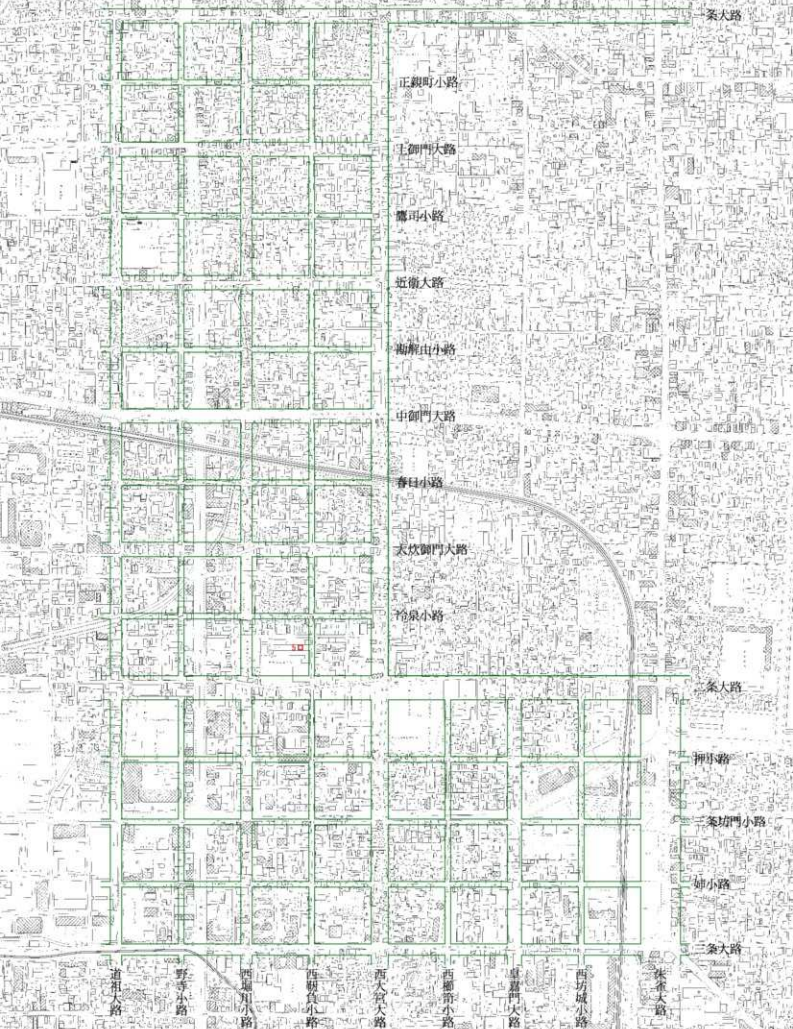
室町小路

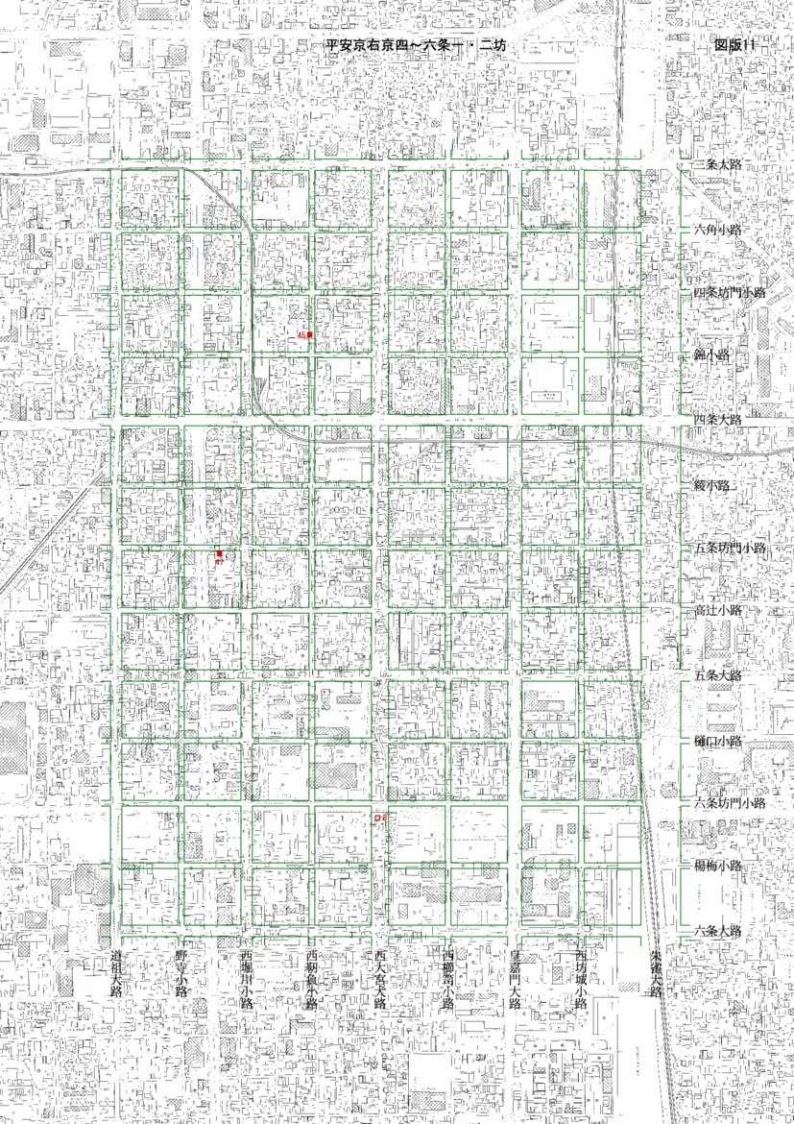
町尻小路

西洞院大路

104







三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

偏梅小路

六条大路

道祖大路

野寺小路

西鷹川小路

西朝魚小路

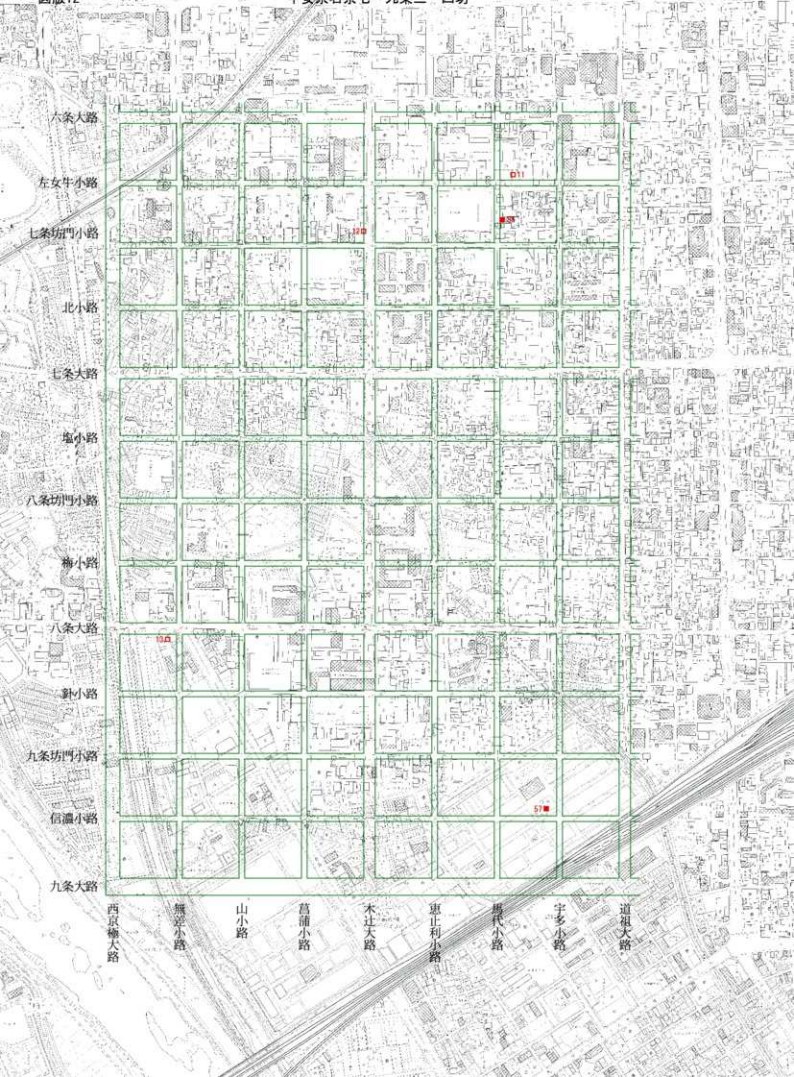
西大宮大路

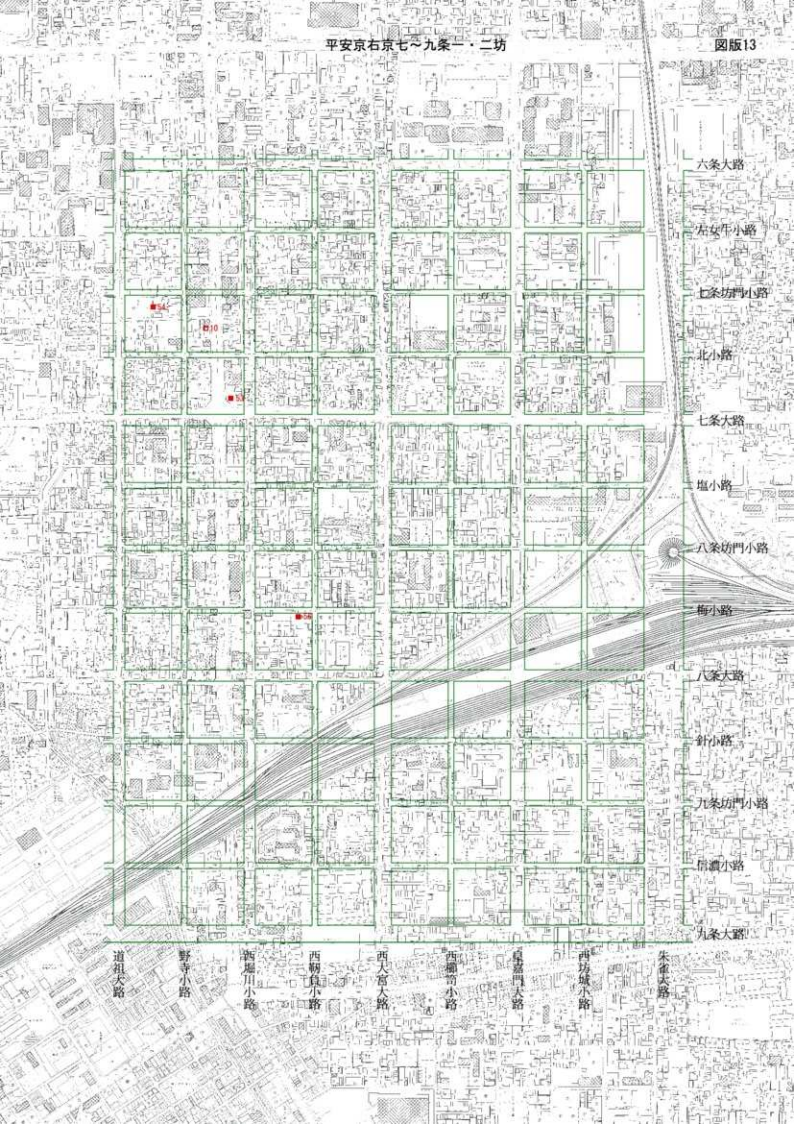
西御所小路

厚嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路





六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

酒屋川小路

西柳真小路

西人宮大路

西彌奇小路

皇嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路

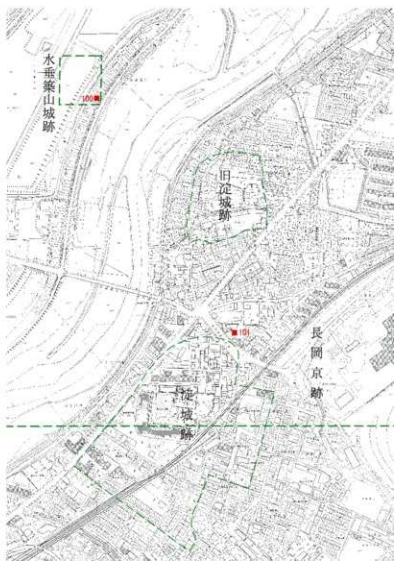
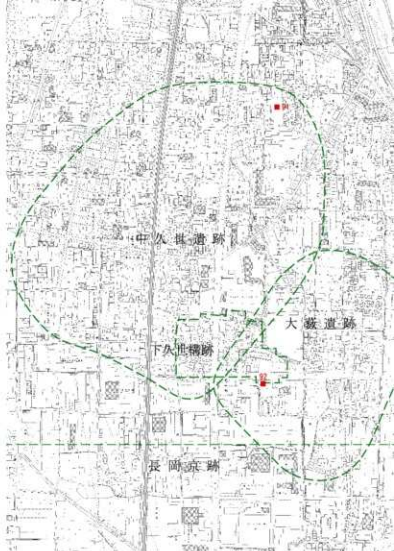


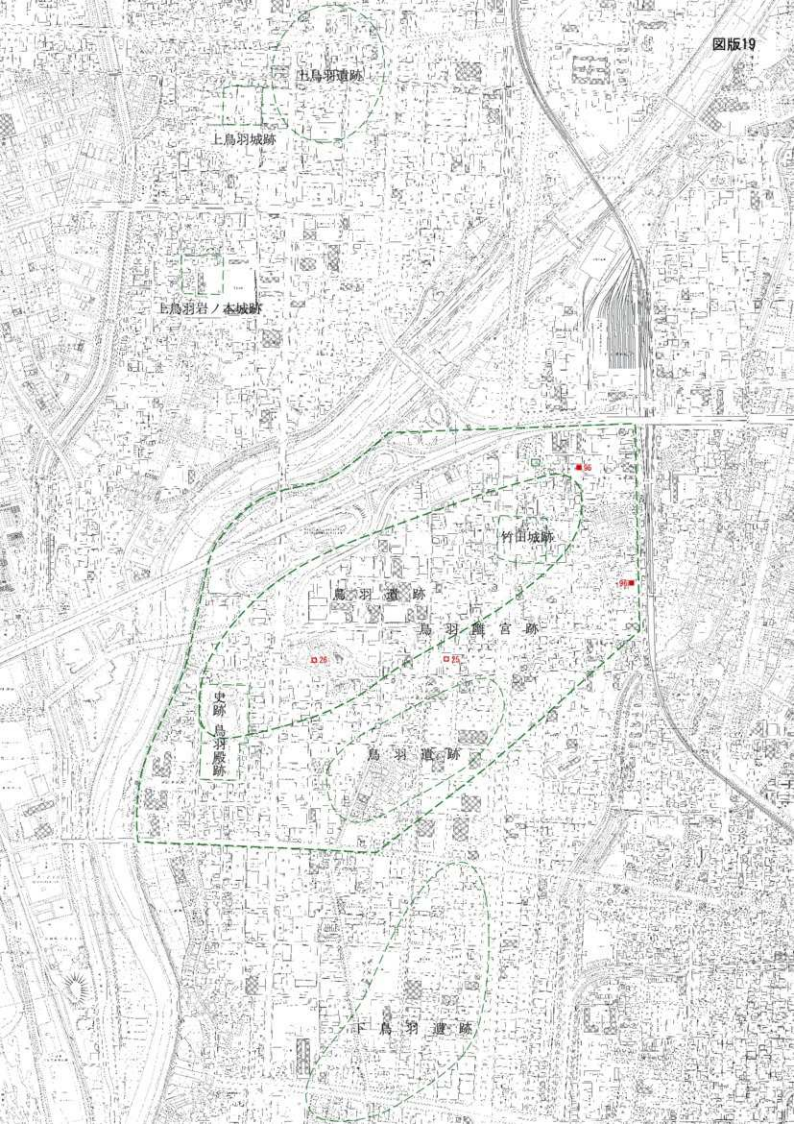


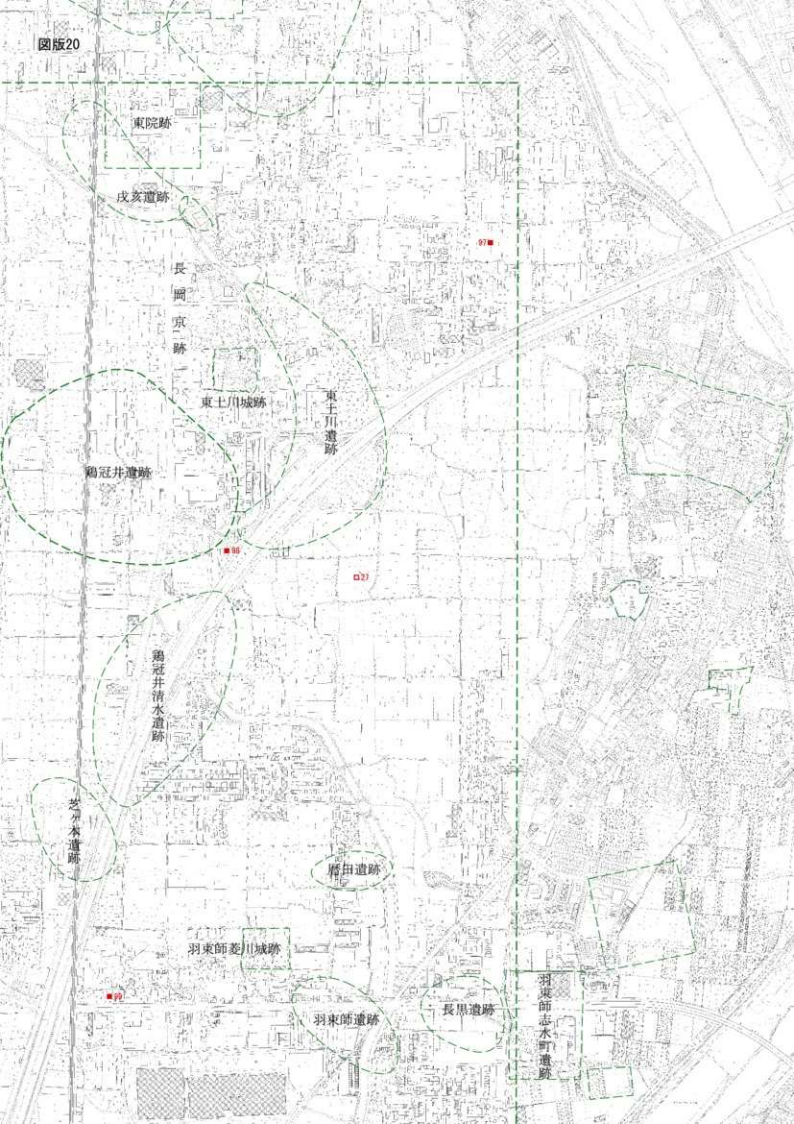
図版16











東院跡

戊亥道跡

長岡京跡

東土川城跡

東土川道跡

鶴冠井遺跡

鶴冠井清水遺跡

芝川本遺跡

馬田遺跡

羽東師菱川城跡

羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡

京都市内遺跡試掘調査報告

平成23年度

発行日 2012年3月31日
京都市印刷物 第233204号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL.(075)761-7799
印刷 奥田印刷株式会社 TEL.(075)441-7060

